

Title	フフホト白塔のウイグル語題記銘文
Author(s)	白, 玉冬; 松井, 太
Citation	内陸アジア言語の研究. 2016, 31, p. 29-77
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/58627
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

フフホト白塔のウイグル語題記銘文

白 玉 冬*・松 井 太**

1. はじめに

中華人民共和国内モンゴル自治区の区都フフホト（呼和浩特 <Kökeqota, Hohhot）市の鉄道東駅（呼和浩特東站）から東方へ直線距離で約 10 km の郊外に、八角七層・高さ約 56 m の巨大な仏塔が聳え立つ。この仏塔は正式には「萬部華嚴經塔」と称され、白色の外観から「白塔」とも通称される。その創建の契機や具体的年代については知られないが、建築様式からみて、おそらくは契丹＝遼帝国時代中後期、遅くとも金代初期までに創建されたと考えられている [村田 1939, 36-41; 村田 1940, 117-118; 劉策 1981, 60-61].

この白塔の各層内部の回廊の壁面には、おおよそ金代から清代・民国期さらには現代に至るまでの間に、白塔を訪れた人々が漢語・非漢語で記した銘文が残されている。それらの多くは、仏教的信仰心からこの白塔に参詣した巡礼者や、あるいは「名所」としての巨塔を訪れた訪問者らが、白塔訪問の記念に書き残した題記である。おおむね倉卒の間に書かれたもので、筆致や文脈も乱れていることも少なくない。しかしながら、とりわけ前近代の題記銘文は、白塔そのものの歴史的・文化的意義、あるいは華北の農耕地帯とモンゴル高原の接壤地帯に位置するフフホトの交通圏や文化圏を考察するための重要な歴史資料となり得る。

これらの題記銘文の史料価値は、合計 163 条にのぼる金代・モンゴル帝国時代・明代の漢文題記を検討した李逸友により示された [李逸友 1977]。例えば、白塔が金の大定二年 (1162) に「重修」された、換言すればこれ以前に創建されていたことや、この白塔がモンゴル時代のフフホトすなわち豊州（天徳軍）の城内の北に位置する「宣教寺」に属し、「白塔」・「宝塔」・「聖塔」など称されたことなどは、漢文題記により明らかになる [李逸友 1977, 55, 56.; cf. 村田 1939, 40-41].

また李逸友は、漢文題記だけでなく、契丹文字・女真文字・ウイグル文字・パクパ文字およびシリア文字（李逸友が「亦思替非文」と称したのは誤り）による銘文についても、いくつかの図版を掲げつつ紹介した [李逸友 1977, 57-60]。特に、シリア文字題記銘文は、東方キリスト教とくに東シリア教会（またはアッシリア東方教会、いわゆる景教、「ネストリウス派」という呼称は学術的には不正確）に関係するものであり、これに帰依したテュルク系オングト（Önggüd）王家が豊州（天徳）＝フフホトを主要拠点の一つとしていたことから、モンゴル時代のテュルク系キリスト教徒の活動の痕跡として注目された。李逸友が紹介したシリア文字

* BAI Yudong. 遼寧師範大学・歴史文化旅游学院・特任教授

** MATSUI Dai. 大阪大学・大学院文学研究科・准教授

題記銘文1条も、実際にはテュルク語で記されていることがまず明らかにされ〔牛汝極 2006a, 323; Niu 2006b, 225〕, その後の検討により、これと併せて計12条のシリア文字テュルク語銘文が白塔に確認されている〔牛汝極 2008, 103–106; Borbone 2008b; Borbone 2013; cf. Zieme 2015, 175–176; 本稿第3章(2)参照〕。

一方、李逸友は、ウイグル文字テュルク語(以下、便宜上ウイグル語と簡稱する⁽¹⁾)およびモンゴル語の題記銘文の存在にも言及し、そのうち2条の写真も公刊していた〔李逸友 1977, 57, 59〕。にもかかわらず、管見の限り、これら白塔のウイグル語銘文の文献学的な解説校訂、さらにそれに基づく歴史学的研究は、これまでに提出されていない⁽²⁾。

本稿の筆者である白玉冬・松井太の両名は、2010年8月、科学研究費による調査の一環としてごく短時間ながら白塔を訪問し、数件のウイグル語銘文を実見した。その後、フフホトの内蒙古大学に研究拠点を置くこととなった白は、2011年から2015年の間に数次にわたって現地調査を行ない、各種の銘文の写真撮影・所在確認とともに予備的な校訂研究を準備してきた。

これと並行して、白・松井は共同して敦煌石窟のウイグル語・モンゴル語題記銘文の調査をも実施してきおり、松井はそれに基づいて、敦煌を中心とするウイグル仏教徒の巡礼活動を検討してきた〔cf. 松井 2013a; 松井 2014; 松井 2015c〕。後述するように、敦煌石窟とフフホト白塔のウイグル語銘文は、その大部分が西暦13~14世紀のモンゴル帝国時代に属し、用語や書式の上でも共通性を見出すことができる。これらの銘文を相互に比較検討することで、ウイグル仏教徒およびテュルク系仏教徒の活動をさらに広範囲にわたって捕捉できる。

このような認識を共有する両名は、フフホト白塔のウイグル語銘文についても連携して検討していくことで合意した。白が2013年11月~2015年11月に日本学術振興会外国人特別研究員として日本(大阪)に滞在し、また松井が2015年4月に大阪大学に着任したことで、両名共同での検討作業をより容易に進めることができた。その上で、2015年12月4日・5日に両名が同道して白塔を再訪して実見調査を行なった。本稿では、その成果として、より資料的価値が高いと考えられる合計21条の題記銘文(Texts A~T)の文献学的テキスト校訂・訳註を提出するとともに、その歴史資料としての利用にむけての基礎的考察を試みる⁽³⁾。

(1) これは、白塔に残されたウイグル文字テュルク語銘文がすべて「ウイグル人」によって書き残されたことを意味するものではない。本文第3章を参照。

(2) 白塔第5層のシリア文字テュルク語銘文の行間に記された、2行のウイグル文字モンゴル語題記銘文については、HugjiltuおよびZiemeによる解説素案が紹介されている〔Borbone 2013, 62〕。ただし、そこで月名とされた *činday-a*「雪ウサギ」〔Lessing, 188; MKT, 1252〕は人名と、また日付とされた *qoyar*「2, 二」は参拝者の人数と解釈すべきであろう: *ḡabudai činday-a qoyar 2mörgün yabuba*「バブダイとチンダガの2人が礼拝して出発した」。なお、このモンゴル語銘文は、書体に鑑みると15世紀以降に属する可能性もある。

(3) なお、両名の共同研究の成果の一部は、すでに言及・引用されている〔Zieme 2015, 175–176, 189; 松井 2016, 銘文 2, 3, 4, 5 (=本稿 Texts E, T₁₋₄, K, Q₁₋₅)〕。

2. テキスト・和訳・語註

以下の校訂テキストにおけるウイグル語転写は、音素表記と翻字を折衷した SUK 2 の方式におおむね準拠する（ただし、母音 e=Y を反映させる）。その他、[abč] は壁面の破損・剥落箇所、(abč) は残画の不鮮明な箇所をそれぞれ推補したものである。---- は壁面の摩滅により文字の有無が判別できない箇所を示す。和訳中の丸数字はウイグル語原文の行数を示す。

なお、本稿で提示するフフホト白塔のウイグル語銘文はいずれも草書体で書かれており、モンゴル帝国時代に属することはほぼ確実である。

Text A

第2層西面，内壁仏龕の南側。

A1 mǎn sulyman bo suburyan biđip 私スライマンが，この塔 [に] 書いて

【語註】

A1: SWLYM'N = sulyman ~ sul(a)yman はムスリム人名スライマン (Ar. sulaymān) のウイグル文字形式。モンゴル時代のウイグル語小麦貸借契 SI 3124 (旧番号 SI Kr I 147) にも SWL'YM'N = sulayman という形式が在証される [松井 2004, 163–162]。なお Erdal は、11世紀後半～12世紀前半のいわゆるヤルカンド文書の一つにみえる SWLM'N = sulman という人名も、Ar. sulaymān のウイグル文字テュルク語表記と考えている [Erdal 1984, V_{a1}]。

テュルク語の suburyan は本来「墓」を意味するが、これを借用したモンゴル語では「塔」の意となる [ATG, 364; ED, 792; cf. BT VII, 34]。本処および白塔の題記銘文の suburyan の諸例 (Texts B₃, M_{4,5}, N₁, Q₃) も、明らかに白塔そのものをさす。語註 M5 も参照。

文末は biđip 「書いて (<v. biti-)」で中断されているが、その後には「出発した (bardim <v. bar-)」や「帰った (yandim <v. yan-)」のような表現が記されるはずであったと推測される [語註 R4a 参照]。

Text B

第3層南面，内壁仏龕の右側。

B1 bo subu(r)yan-ta mǎn ǰayači čay mǎn alđ(miš) mǎn (..)L(...)
 B2 mǎn (...)YČYW šal mǎn külüg mǎn tuñuq mǎn yaši baš
 B3 mǎn L(.) [](.) biz säkiz b(o) suburyan
 B4 üstün-ki b(a)š? y(eg)? burxan-lar-niñg • küčin-
 B5 -g(ä) mǎn ǰayači čay tep? nom? SW[](.)N-ʻ qar(.....)

①この塔で、私アヤチ=チャグ、私アルトミシュ、私……、②私(...)YČYW=シャル、私キュリユグ、私トウヌク、私ヤシ=バシュ、③私 L(.)L(.)、私達 8 人が、この塔の上(層)の最上の(?)諸仏の力⑤により、私アヤチ=チャグ (が書いた(?)) と言って(?) 法(?) ……………

【語註】

B1: 最初に言及される人名 *ayači čay* は第 5 行にもみえる。前半の 'YČY = *ayači ~ ayači* はモンゴル時代の漢文資料で愛牙赤と表記される人名か。

行末の第四の人名は語中の -L- 以外は判読困難。あるいは ('W)L('X'N) = *ulayan* (< Mong. *ulayan* 「赤, 紅」) と読むべきかもしれない。

B2, (...)YČYW šal: 前半の (...)YČYW は人名であろうが転写を確定できない。後続する *šal* = Š'L は、トゥルフアン出土のウイグル語仏典識語や世俗文書にも、人名要素あるいは称号としての用例が確認される⁽⁴⁾: ① U 345, ₃₇buyan qay-a šal [BT XIII, 157; cf. BT XXVI, 119]; ② U 2966, ₁₃₅₋₁₃₆el čaqır šal [BT XIII, 120]; ③ U 5236, ₄₋₅[...] buqa šal [SUK Sa15; Sertkaya 2002, 286]; ④ U 5288, ₉₋₁₀[...] šal [松井 1998, Text 4]; ⑤ U 5510, ₃SW[...]K šal [松井 1998, Text 15]; ⑥ *U 9195 (T III M Kloster 2 Nr. 134), ₁₄alp töläk qay-a šal [cf. Sertkaya, O. F. 2006, 134].

これに関連して注目すべきは、『集史 (*Ġāmi' al-Tawārīḥ*)』チンギス紀が、モンゴル帝国勃興前後のナイマン (Naiman) 王国では *šāl* という称号が「帝王の子 (*pādšāhzāda*)」を意味した、と記すことである [ĠT/TS, fol. 100a; ĠT/Rawšan I, 477-478]. 周知の通り、モンゴル帝国勃興以前からナイマンとウイグルは文化的に密接な関係にあったから、『集史』の伝えるナイマンの称号 *šāl* と、語形を同じくするウイグル語の称号 *šal* との間には、何らかの関連が想定される。

ナイマンの *šāl* 号は、契丹=遼王朝で王子・王族・貴族に与えられ、「郎君」と漢訳された契丹語の称号 *šāl* (> Chin. 舍利~沙里) に由来すると考えられている [杉山 2010, 25-26; cf. 清格爾泰 et al. 1985, 117; 大竹 2015, 1; 大竹 2016b, 9; 武内 2016, 12]. 一方、前掲のウイグル語文献の用例①~⑥のうち、①の Buyan-Qaya šal は 14 世紀前半のウイグル王族に準じる地位にあったらしいが [Zieme 1992, 53], 残る②~⑥の *šal* 号をもつ人物については、王族・貴族層に属したとは考えづらい。さらに本題記銘文でも、(...)YČYW šal は参詣者 8 名のうち 4 番目に言及されており、その地位が高いとは思われない。従って、Uig. *šal* は、ナイマンの *šāl* と同じく契丹語 *šāl* 「王子・王族」に由来するとしても、語義の上では完全には対応しなかったものと推測される。チュルク語で「男性王族, 王子」を原義とする *tegin* が後代には一般的な称号・人名要素としても汎用されたことも参照できる。

(4) これまで①③④⑤の用例は *šal* と転写されてきたが、②⑥では語頭の Š- の右側に判別点を加えた Š'L = *šal* の形式で在証されていることから、修正する。

また、本銘文 Text B および前掲①③④⑤⑥の Uig. šal の在証例は、明らかにモンゴル時代に属する。年代を特定しがたい楷書体仏典写本の②にも、モンゴル時代より古いことを示す指標は見当たらない。従って、Uig. šal はモンゴル時代からそう古くは遡らない時期に導入されたものであろう⁽⁵⁾。契丹語 sāi を直接に借用したものであれば、その時期は西遼支配時代かもしれない [cf. 松井 2013b, 67].

B3-4: bo suburyan üstün-ki 「この塔の上（層）の」とは、白塔の最上層＝第7層をさすのであろう。後続の b(a)š y(eg) = P(ʻ)Š Y(YK) 「第一に勝れた；最上の」は不鮮明であるが、baštinqi yeg ~ yeg baštinqi [BT XIII, 93; BT XXV.2, 344, 443] などと同義の表現と考えた。本処の b(a)š? y(eg)? burxan-lar は「最上の(?)諸仏」は、第7層に仏像が塑像もしくは絵画・幡画として安置されていたことを推測させる。

B5: 「法 (nom)」以下は、それ以前と筆致が若干異なり、別の題記とみなすべきである。

Text C

第3層南面、窓の東壁。この銘文は李逸友 1977, 57, 図5として公表されているが、これまでに解読研究はない。

C1	män öz toyriñ kümkä bitidim	私オズ=トグルル会堂番が書いた。
C2	tavišyan yil altinč ay säkiz otuz-(qa)	兔年第六月二十八日に。

【語註】

C1a, öz toyriñ: トウルフアン出土のウイグル語盟約契 (SUK Mi09) の書記として同名人物が現われるが、別人であろう。

C1b, kümkä: この kümkä = KWYMK' という術語は、内モンゴル自治区赤峰市の元代の松州城遺址で発見された西暦 1253 年のウイグル語キリスト教徒の墓誌にも在証され、墓主ヨナ

(5) ちなみに、モンゴル帝国時代のウイグル人官僚ユリン=テムユル (Yulīn-Tāmūr > 岳璘帖穆爾) 一族の伝記「高昌僕氏家伝」(歐陽玄『圭齋文集』巻11)は、西ウイグル王国の「大臣」がウイグル語で「設」あるいは「沙爾」と称されたと伝える [宮 2011, 712-713]。周知の通り、「設」は突厥・漠北ウイグル帝国の官称号 šad の音写として隋・唐代の漢文資料に頻見する [護 1967; 山田 1989, 144-145]。また「沙爾」は、契丹語 sāi > Chin. 沙里~舍利もしくは Uig. šal に対応すると推測される。しかし管見の限りでは、テュルク語の šad が「大臣」その他の官称号として西ウイグル時代のウイグル語文献に在証された例はなく、また T. šad > Uig. šal という変化も想定しづらい。おそらく、「設」と「沙爾」に関する「高昌僕氏家伝」の説明は牽強附会であり、漢文典籍を通じて知り得た突厥・漠北ウイグル時代の称号 T. šad (>設) とモンゴル時代まで称号として用いられた Uig. šal (あるいは契丹語 sāi) とを根拠なく関連させたものであろう。ユリン=テムユル一族に関する伝記資料には、その家祖を突厥第二帝国時代の重臣トニユクク (Tonyuquq > 墩欲谷) とするなど、古代テュルク的伝統を意識した作爲的な叙述が散見すること [梅村 1984, 131-136; 中村健太郎 2007, 94] も留意される。

ン (yonan < Syr. ywnn [yawnan]) の称号 kümkä sānggüm を構成している。この kümkä を、Hamilton・牛汝極は kōm(ä)k(k)ä と転写して T. kōmāk「補助軍団, 予備兵」に与格語尾 -kä が接続したものとみなし、後続の称号 sānggüm「長; 長官」⁽⁶⁾とあわせて「補助部隊に配置され

(6) この Uig. sānggüm は、トゥルファン出土の西暦 1369 年モンゴル語文書 (BT XVI, Nr. 68) に人名あるいは称号として在証される senggüm と明らかに同語である。『元朝秘史』でも、Mong. senggüm はケレイト (Kereid) やナイマンの有力者の人名・称号として用いられ、翔昆～鮮昆～桑昆～想昆～先髡と漢字音写される (『元朝秘史』には格語尾を伴う senggüm-i > 桑古迷, senggüm-ün > 桑古門, senggüm-lüge > 桑昆魯額という音写例もあり [栗林 2009, 423-424])。この人名・称号はモンゴル時代のペルシア語史料では sangum ~ sangün ~ sāngün と表記され、『集史』はその原義を「王侯の息子 (hūdāwand zāda)」と伝える [GT/Rawšan I, 117, 119]。これらの諸点から、Pelliot は、Mong. senggüm (> Pers. sāngün) は漢語「將軍」ではなく宰相・貴人をさす敬称「相公」の借用語であり、また 10 世紀以降の契丹=遼帝国で「詳穩～常衮～敵穩」と音写された称号もこれと同源・同語とみなし、この解釈が現在に至るまで通説となっている [Pelliot 1930, 45-46; Pelliot 1944, 54; Pelliot / Hambis 1951, 331, 334; Pelliot 1963, 825-826; Boyle 1963, 249; TMEN III, Nr. 1221; Rachewiltz 2004.1, 286]。村上正二も、『元朝秘史』にみえる senggüm の語源として、当初は①漢語の「將軍」、②それから転訛した契丹語の称号「詳穩」、③漢語「相公」、という 3 案を提示したものの [村上 1970, 55]、後には自説を改め、漢語「相公」が契丹語で「詳穩」となり、そこからモンゴル語に借用されたこととみた [村上 1972, 102-103; cf. 宮 2011, 713]。Hamilton・牛汝極も、ウイグル語ヨナン墓誌の sānggüm の語釈に際しては Pelliot の「相公」説に依拠したが [Hamilton / Niu 1994, 152]、牛汝極は後になって、遼代の「詳穩」や漢語の「將軍」に由来する可能性をも指摘している [牛汝極 2008, 109]。また、Uig. sānggüm ~ Mong. senggüm とは別に、明らかに「相公」に由来する sanggung という称号もモンゴル時代のウイグル語印刷仏典やモンゴル語文書に在証される [BT XIII, 228; MDQ, 111-112]。中期モンゴル語の人名・称号を包括的に検討した Rybatzki は、senggüm と sanggung [sic!] (~ sanggung) とを別形式とみなし、後者は正しく「相公」の借用語とし、前者の語源については「將軍」・「相公」双方の可能性を指摘している [PTMD, 707-708]。形式の相違に鑑みれば、Uig. sānggüm ~ Mong. senggüm については、sanggung < 相公とは異なる語源や借用経路が想定される。ところで、「詳穩」と漢字表記される契丹語の音価は sānggun ~ saṅun ~ sāṅun と再構すべきことが解明され、やはり漢語「將軍」に由来する可能性が提案されている [王弘力 1986, 62]。ただし、この契丹語が漢語「將軍」を直接に借用したものであれば、あえて「詳穩」と漢字表記されるのは不自然である。実際、漢語「將軍」は契丹文字では tsian gyn という異形で表記される [武内 2016, 15]。ここで、突厥・漠北ウイグル時代の古代テュルク語碑文および西ウイグル時代のウイグル語文献に、漢語「將軍」を借用した称号・人名要素 T. saṅun ~ sāṅün ~ Uig. sangun が頻見すること [Hamilton 1955, 154; Ecsedy 1965, 87; ED, 840; User 2009, 266]、また遼帝国建設に先立つ 9 世紀前半～中葉には契丹が漠北ウイグル帝国の実質的な支配下にあったことを想起すれば、契丹語 saṅun ~ sāṅun はウイグル支配期に T. saṅun ~ sāṅün から借用されたと考えられる [e.g., 松井 2013b, 58-59; cf. 大竹 2016a, 5]。この T. saṅun ~ sāṅün ~ Uig. sangun 自体も、五代・宋代の漢人には相温 (< saṅun ~ sāṅün)・薩温～娑温～撒温 (< saṅun < saṅun ~ sangun) などと音写され、「將軍」由来とは認識されていない [Hamilton 1977, 514]。また、遼帝国さらには金帝国の「詳穩」は、「相公」のような敬称ではなく、おおむね官署の「長; 長官」に相当する官職名として用いられており [cf. Wittfogel / Feng 1949, 129, fn. 42; Menges 1968, 35; Hamilton / Niu 1994, 153; 『金史』卷 57・百官志三・諸冗条; 『金史』国語解], T. saṅun ~ sāṅün は契丹語に借用され「(軍事・行政) 組織の長; 長官」の意に転じたことと推測される。確かに「相公」と称される契丹人の例も漢籍史料に見出される: 『旧五代史』卷 84・晋書 10・少帝本紀, 開運二年 (945) 三月条「庚戌, ……易州奏, 郎山塞將孫方簡破契丹千餘人, 斬蕃將諸里相公, 擄其妻以獻。甲寅, 杜威奏, 收復滿城, 獲契丹首領沒刺相公, 并

た長官」と解釈した [Hamilton / Niu 1994, 152; 牛汝極 2008, 106–111].

しかし、この墓主ヨナンについては、アルマリク（阿里馬里 < Almalīq）出身で元代に濟寧路に土着した東方キリスト教徒一族に関係する石刻資料群（道光『鉅野県志』巻 20 所収）に家祖として言及される「岳雄」に同定する（岳雄を岳難 < Uig. yonan の誤記とみる）ことが、張佳佳により提案されている [張佳佳 2010, 44–45]. これを承けた馬曉林は、チンギスに仕えた岳雄が「特に□陸哥職事を授けられた【特授□陸哥職事】」ことをヨナン墓誌にみえる称号と関連させ、「□陸哥」については、「闕陸哥／古陸哥」などと推補して kŭmkā あるいは kōmkā の音写とみなすことを提案した [馬曉林 2016, 136–137]. いずれも卓見であり、我々も張佳佳・馬曉林の考証に従うものである。

本処ウイグル語題記の文脈からは、sänggüm を伴わない kŭmkā 自体が一つの称号・職掌であることが裏付けられる。馬曉林もその語源や発音形式については不明としたが、我々は、これをシリア語 qwmky' [qŭmkāyā] の借用語と考え、kŭmkā と転写することを提案する。Syr. qwmky' は qwnky' [qŭnkāyā] ~ qnky' [qankāyā] “sacristan, doorkeeper (of church)” の異形と考えられている [Brock 1982, 171; DChrSS, 346; cf. Sokoloff, 1337, 1385]. 人名に後続する称号としての qnky' の用例は、セミレチェ発現の西暦 1307 年シリア語キリスト教墓誌にも確認され [Chowolson 1897, 17, No. 60], ラッパン=サウマ (Rabban Ṣawmā, d. 1294) も西遊以前にはカンバリク (Qan-Baliq, かつての金の中都) 地区の東方キリスト教会で qnky' の職に任じられていた [Pelliot 1973, 249–250; Borbone 2008c, 66].

東方キリスト教会における qnky' ~ qwnky' ~ qwmky' の実際の職掌は多様だったらしく、つとに Chwolson は「寺男, 聖具管理人, 打鐘係のようなもの (etwa der Küster, Sacristan, Glöckner)」と説明し [Chwolson 1897, 57], 佐伯好郎は「会堂番」・「闕家 (門衛職)」などの訳語を与える [佐伯 1943a, 551; 佐伯 1943b, 180]. また Pelliot は「聖具管理人 (sacristain)」と訳しつつ、諸先学による「番人, 会計係 (gardien, procureur); 果樹園丁 (verger); 保守係, 門番 (ostiarus)

蕃漢兵士二千人」; 同, 開運三年 (946) 八月癸亥条「李守貞奏, 大軍至望都縣三, 相次至長城北, 遇敵千餘騎, 轉鬪四十里, 斬蕃將解里相公」。とはいえ、これらの「相公」は、むしろ契丹語の saṅun ~ sāṅun > 詳穩を不十分に音写したものが、あるいは、あくまで漢語として、契丹の軍事指導者を呼称したものとみなすこともできる。漢語「相公」は契丹文字で siangun ̐ と表記され、saṅun ~ sāṅun 「詳穩」とは形式が異なることも留意される。愛新覺羅烏拉熙春がこの両形式を結びつけるのは些か倉卒であろう [愛新覺羅烏拉熙春 2004, 133; cf. 武内 2016, 15]. なお、これまでに確認されている限り、Uig. sangun の用例は全て西ウイグル時代に属する [森安 1994, 69, 82; 森安 2004, 9; cf. 森安 1998, 11–12]. 従って、T. saṅun ~ sāṅun ~ Uig. sangun 「將軍」は、西ウイグル王国では 12 世紀末までに使用されなくなったものの、遼・金およびその影響下にあったモンゴル高原の諸遊牧集団の間では saṅun ~ sāṅun (> 詳穩) や異化した sänggüm ~ senggüm (> Pers. sangum ~ sangūn ~ sāngūn) という形式で継受され、モンゴル時代に至るまで使用されたとみられる。『集史』の sāngūn ~ sāngūn に対する「王侯の息子」という語解も、この「長; 長官」の称号が遼・金から諸遊牧集団の有力者やその一族に与えられるものであったという事情を想定すれば、不自然ではなからう。以上の点から、モンゴル時代の Uig. sänggüm (~ Mong. senggüm) の訳語としては「頭, 長; 長官」を採る。

or keeper)」などを注記している [Pelliot 1973, 249–250 & fn. 1]. Borbone は「番人 (gardien)」と訳し、その職掌は「聖域の保護責任者」であって、聖具管理人 (sacristain) や教区司祭 (prêtre-curé) などの任務にもあたっており、聖職者に対しても一定の権威を有したと注記する [Borbone 2008c, 177]. 前述のアルタン=ブカー族の家祖ヨナン (岳雄) の職名が「□睦哥職事」とされ、kümkä が漢訳されず「□睦哥」という音写のみで示されることも、その職務が多岐に亘っており、簡明・的確な漢語に包摂できなかったことを反映するものであろう。

このような背景をふまえた上で、本処の Uig. kümkä の訳語としては、佐伯の訳語「会堂番」を採用しておく。また、ヨナン墓誌の kümkä sānggüm については「会堂番頭」と試訳する。墓主ヨナンがモンゴル宮廷 (あるいはコンギラト王家の家政機関) で「本宮の主 (ordu igāzi)」として多様な職務を担当したことを、東方キリスト教会の「会堂番 (qwmky' > kümkä)」職になぞらえたものと解釈できるであろう。

Text D

第4層東面、窓の北壁。ウイグル語題記 D1, D3, D4 各行の筆者が同一人物であるかは不明 [語註 D3–4 参照]。第2行の漢文題記は李逸友により移録されているが、修正を要する [語註 D2 参照]。第4行の uđmañ の下にも民国期の漢文題記が記されるが、省略する。

D1	'WT
D2	大安三年九月初一日記王 思 義	
D3	tükādim	私は全うした。
D4	uđmañ	ウトマン

【語註】

D1, 'WT: 第4行の人名 uđmañ = 'WDM'N を、本処では 'WTM'N と書きかけて中断した可能性もある。語註 D4 参照。

D2: 李逸友は「大定三年九月初一日記王恩義」と移録したが [李逸友 1977, No. 407], 修正する。筆者の名のうち、「思」は「宣」あるいは「旦」と読むことも不可能ではない。金の大安三年 (辛未) は西暦 1211 年にあたる。同年の漢文銘文として「大安三年十月初五日 □」 「大安三年九月十二日」のものが確認される [李逸友 1977, Nos. 334, 709].

D3–4: 第4行→第3行の順に読み、「私ウトマンが全うした」と解釈すべきかもしれない。

D4, uđmañ: この人名「ウトマン」は、漢文資料では兀都蛮～斡秃蛮などと音写される、ムスリム人名ウスマン／オスマン (Ar. uṭmān ~ Pers. uṣmān) のウイグル文字表記であろう。11世紀後半～12世紀前半のヤルカンド文書にも、'WTM'N = utman というウイグル文字テュルク語借用形式が在証される [Erdal 1984, III₃, IV₃, V_{a2,b2}].

Text E

第5層南面，窓の東壁．草書体．嘉靖三十八年（1559）の漢語銘文〔李逸友 1977, No. 517〕の下方．右脇には李逸友 1977 未収録の「至正十四年」という漢文題記がみえる．

E1	män qamīl-līy	私，ハミ出身の
E2	sanggadaz ačari	サンガダス阿闍梨が
E3	yükünü täginti(m)	謹んで礼拝した．

【語註】

E1, q(a)mīl: 元代には哈密力～哈密里～合木里などと音写された地名で，現在のハミ（哈密；NUig. Qomul）に比定される．

E2, sanggadaz ačari: 人名 sanggadaz (< Toch. < Skt. saṃghadāsa) の語頭の S- は，初見では X- のようにもみえる．その称号の「阿闍梨 (ačari)」は判読しづらいものの，実見のうえ確認することができた．

Text F

第5層南面，窓の西壁，草書体．各行とも行末部分は破損しているため，銘文の有無を含めて判読しづらい．

F1	(...)[]'W[](.)YM män? inäki? atly? (...)[]
F2	(.....)(..)[] ädgü ol kāmür []
F3	[bi](t)dim (....) birlä? buqar? []

①…………私(?)イネキ(?)という名の(?)…………②…………良好である．憂い……③私が書いた．…………とともに(?)寺(?)…………

【語註】

F1, inäki: この人名はトゥルファン地域チクティム出土のウイグル文供出命令文書にも在証される [cf. Matsui 2015a, 276]．ただし，本処の綴字は不鮮明で，あくまで試案である．

F2, kāmür: モンゴル語 gemür 「憂い，憂愁；不安」[MKT, 757] の借用語とみる．ウイグル文字表記を伴う『續増華夷譯語』通用門（北京圖書館古籍珍本叢刊 6，書目文獻出版社，179）に Mong. gemür > 客木兒＝憂という対訳例が在証され，またいわゆる甲種本『華夷譯語』の「誥文」にも格木兒＝憂という対訳例がみえる [栗林 2003, 78–79; MMHY II, 44]．さらに，至正五年（1345）居庸關パクパ字モンゴル語碑文にも gemür č'imur ébečin č'ar-un nere usadč'u 「憂

愁・飢渴 (č'imur = čimür)・疾病・苦難の名が消えて」という表現がみえる [照那斯圖 1991, 172, 177; 呼格吉爾圖・薩如拉 2004, 447, 451]. この Mong. gemür čimür という二詞一意を借用した Uig. kāmür čimür も、敦煌出土のウイグル語曆占文書 (Peald 6h verso = 松井 2011, Text C) に在証される: _{a11}iš išlāsār būdmāz kāmür čimür bolur yavız ol 「仕事をしても全うできない. 憂愁・飢渴が生じる. (この日は) 凶である」⁽⁷⁾. 本題記銘文の文脈は、筆者が自らの健康・精神状態について「良好であり、憂い [は無い]」などと記したものと解釈しておく.

F3: 行頭の「私が書いた ([bi](t)dim)」だけは筆致がやや大きい.

Text G

第5層南面, 内壁, 仏龕の左側壁のほぼ中央部. 摩滅が著しく, 解読は困難である.

G1 kūsükü yıl on? ü(č)? män? M(...) [](....) yanga? van? kir? kiš? bitidim[i]z

鼠年 十(?) 三(?) 私(?)……………ヤンガ(?), ヴァン=キル=キシユ(?)の私達
が書いた.

【語註】

G1: 冒頭の「鼠年 (kūsükü yıl)」には月・日が後続することが期待されるが, 明瞭には判読できない. on 「10, 十」は具格 -in 「(鼠年) に」とも読めるが, 後続語を序数詞 üčünč 「第三」(または onunč 「第十」) に読むことは難しい. あるいは数詞 on 「10, 十」だけで「十月」, また üč 「3, 三」だけで「(初旬の) 三日」を意味するのかもしれないが, 他に類例をみない.

後続部分も, 文末の「私たちが書いた (bitidim[i]z)」の直前までは, 判読・解釈ともに困難である. 頻出する人名ヤンガ (yanga 「象」) に後続する van は, 例えば樊 (パクパ字音写では fan) などの漢語姓を音写したものと推定できる. ただし別解として, この両語を yangī-qa ~ yangī-ta 「初 (旬の) □日に」と読むことも可能である. ウイグル語 kir は周知の通り「泥, 汚れ」, kiš は「黒貂」[ED, 752] を意味する. この両語 kir kiš で一つの人名とみたが, あくまで試案であり, 他の可能性を排除しない.

Text H

第6層西面, 外壁 (西門入口の南隣).

H1 vačir-a bitidim 私ヴァチラが書いた.

⁽⁷⁾ この kāmür čimür を疾病と老化を示す表現と推測した松井の旧案 [松井 2011, 35-38] は修正する.

【語註】

H1, vačir-a: = V'ČYR-' < Skt. vajra 「金剛」. 本処では人名. モンゴル時代の漢文資料では瓦赤刺～瓦咱刺～把匝刺などと音写される. 同じく Skt. vajra に由来する V'ŽYR = važir という形式も人名としてウイグル語文献に在証されるが [e.g., SUK Sa06; BT XXVI, 268], これはトカラ語 wašir もしくはソグド語 βž'yr を経由したものであろう [ATG, 380; cf. 庄垣内 1978, 95; Zieme / Kara 1979, 24; Zieme / 百濟 1985, 152; DTochB II, 632].

Text I

第6層東面, 窓の北側壁. この銘文の写真複製は, 李逸友 1977, 57, 図4として公刊されている. しかし, おそらく1983～1986年に実施された保護修繕工事 [cf. 張漢君 1994, 69]の際に塗抹され, 現在では下半部分を判読できない. 本稿添付の図版を比較参照せよ.

I1	kä quɖluɣ küskü yil	甲の気をもつ鼠年
I2	törtünč ay-qa män iñtu?	第四月に, 私インドゥ=
I3	(q)ara? bitidim	カラ(?)が書いた.

【語註】

I1: 十干の「甲」を K' = kä と音写するのは, モンゴル時代のウイグル語の特徴である [庄垣内 1987, 85]. 「甲の気をもつ鼠年」すなわち甲子年は, 西暦 1264 年 (世祖クビライ中統五年. 八月に至元元年に改元) あるいは 1324 年 (泰定元年) に相当する可能性が高い.

I2-3, iñtu? (q)ara?: この判読は暫定案である. 人名 iñtu ~ iñdu ~ hñdu は漢文資料では忻都～欣都～印突などと音写される.

Text J

第7層南面, 回廊内壁, 藏経閣南入口の西側壁の中段.

J1	luu yil altinč ay beš ygrmi-	龍年第六月十五日
J2	-kä biz [qa](mıl)-lıy qarš-a açari	に. 私達 [ハ] ミのカルシャ阿闍梨,
J3	buyan qay-a vildazun açari	ブヤン=カヤ, ヴィルダズン阿闍梨,
J4	(.....) (sä)vinč buyan • ta[p]ıyı	…………セヴィンチ, ブヤンが, 供物を
J5	berip bo iduq stup-ta	与えて, この聖なる塔で
J6	(y)u(k)üngäli kälip yükünüp tägzinip	礼拝するために来て, 礼拝し圍繞して
J7	[]T' (.....)	……………
	[MISSING]	[後缺]

【語註】

J2, [qa](mīl)-līy qarš-a ačari: [qa](mīl) 「ハミ」 [語註 E1 参照] は不鮮明であるが、語後半の -MYL が辛うじて判読でき、文脈から推補する。トゥルファン出土のウイグル文土地交換契 (SUK Ex01) にも「カルシャ阿闍梨 (qarša ačari)」という同名の仏僧が現われるが、おそらく同一人物ではなからう。

J3, vildazun: 後続する「阿闍梨 (ačari)」からは仏教徒名とみなすべき。この人名の後半の要素 -zun = -Z-WN は、あるいは -zen = -Z-YN と読んで、梵語で人名要素として頻用される sena 「軍」のトカラ語借用形式 sem に由来するものとみなすべきかもしれないが (e.g., Uig. adityazen < Toch. *ādityasem < Skt. ādityasena) [cf. 松井 2013a, 39], 前半部分を適当なトカラ語仏教術語に再構できない。

J5, İduq stup: stup < Skt. stūpa 「塔」 [ATG, 364]. 前掲語註 A1 にみた suburyan 「塔」と同じく、白塔そのものをさすことは明らかである。漢文題記にも、本処と同様に白塔を「聖塔」と称した例が確認できる [李逸友 1977, No. 710].

J6, tägšīnip: < v. tägšin- ~ tägzin- 「回る, めぐる」 [ED, 488]. 本処では白塔各層の回廊を「圍繞する」ものとみる。本処と同じく yūkūn- 「礼拝する」と tägzin- 「圍繞する」が熟した用例は後掲 Text R₃, T₃ にも在証され、また漢文題記にも「繞塔禮念保身安」という例 [李逸友 1977, No. 708] がみられる。

Texts K, L, M

第7層南面, 回廊内壁, 藏経閣南入口の西側壁の下段. 筆致からみて, Text K (第1行), Text L (第2行~第4行前半), Text M (第4行後半~第6行) の計3条に判別できる。ただし, Text K, L は, 若干字寸が異なるものの, 同一人物の筆跡とみられる。

K1	toqsīn-līy buyan qulī šabi qīy-(a)
K2	bir kăzig biđimīš boldumuş yapılmaşun-lar tep biđidim yamu
L3	bečin yīl aram ay tört ođuz-qa
LM4	mān toqsīn-līy bo (s)uburyan mān SW(...)Y(.)
M5	b(o) (s)uburyan? buqar? kă[](ip)? (?) [] (...) (..)
M6	[] S(.)D(...) (...) K(.)P -----

K : ①トクシンのブヤン=クリ沙弥なる②私どもが1行書いたのであった。「(この銘文が)覆われてしまわないように！」と私が書いたのである。

L : ③猿年正月二十四日に。④私トクシンの

M : ④この塔 私…… ⑤この塔?寺? (に) 来て? ……………⑥……………

【語註】

K1, toqsün: 魏氏高昌国時代～唐代の篤新 **tuok-sjĕn* (または啄進 **ġāk-tsjĕn*) に由来し、元代には他古新と音写されたオアシス都市名。現在のトゥルファン (Turpan > 吐魯番) 市の西方約 50 km のトクスン (NUig. Toqsun > 托克遜) に比定される。すでに複数のウイグル語世俗文書に在証例が確認されている [Matsui 2015a, 275–276; 松井 2015b, 64].

K2a, biđimiš boldumuş: ウイグル語題記銘文において、「記した (biti-) ; 礼拝した (yükün-)」などの筆者の行為を叙述する際には、一般的には一人称過去終止形 -tIm(Iz) ~ -dIm(Iz) が用いられるが、完了形 -miš/-miš を用いる例も確認される: biz mōnkā torčġ tur buqa tāsāk üçäğü kalip buqar süm-kā yükünmiš 「私達モンケ=ドルジ, トウル=ブカ, テセクの三人が来て, 寺院に礼拝した」 [cf. Hamilton / Niu 1998, 146–148]. また, トヨク出土の「シヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書」に属する Dx 9548v にも män pusartu qumna taz bitimiš boldim čġn'ol 「私ブサルドゥとクムナ=タズが書いたのであった。(これは) 真実である」と、本処と同様に完了形 bitimiš に過去形 boldim が後続する例がみえる [DhSPB 14, 177; cf. Matsui 2010, 702]. 動詞完了形 -miš / -miš に bol- が後続する用法については, Erdal 2004, 271–272 を参照.

K2b, yapımaşun: < v. yapıl- 「覆われる ; 閉じられる」 [ED, 877]. この題記銘文が後人の題記その他で「覆われる (塗抹される)」ような事態を想定した表現であろうか.

M5: この行は判読困難で, (s)uburyan 「塔」, buqar 「寺」, kă[I](ip) 「来て (< v. käl-)」はいずれも暫定案である. (s)uburyan の -γ- の綴字は -W- のようにみえる. 「塔寺 (suburyan buqar)」という表現については, 榆林窟第 12 窟のウイグル語題記銘文の suburyan süm-ä 「塔寺」という在証例も参照できる [松井 2013a, 37; 松井 2015c, 217–218]. 本処では, 白塔とそれを擁する宣教寺を示す表現であろう. 語註 T2 も参照.

Text N

第 7 層南面, 回廊内壁, 藏経閣南入口の西側壁の下段.

N1	bo suburyan-ta	この塔に
N2	män büčäk	私ブチェックが
N3	olurup bitidim	滞在して書いた.

【語註】

N2, büčäk: 『元朝秘史』(12:35:02, §277) で不者克と音写されるモンゴル人名 büjek [栗林 2009, 100] と同一の人名であろう. この人名は, 漢文史料では撥綽～撥徹, ペルシア語史料では BWČK = büčäk ~ BWĠK = büğak と表記される [Hambis 1945, 88–89; PTMD, 187].

N2, olurup: この表現については語註 T2 を参照.

Texts O, P

第7層西南面，回廊内壁，藏經閣南入口の南側，壁の下段。シリア文字テュルク語題記銘文 [Borbone 2013, VII.2] の題記の北 (=左) 下方。写真複製が牛汝極 2008, 23, 図版 1-28 とし紹介されているが，解説校訂は提示されていない。筆致や年月の相違からみて，第1行と第2-3行は相互に関係しない別の題記である。なお，南 (=右) 隣には「至元十一年五月初一日」付けの漢文題記 [李逸友 1977 には未収] が記される。

O1 luu yil altinč ay

P1 taqıyü yil törtünč ay-nıng

P2 beš y[a]ngi-qa tonga ǰars[la]n ša 戲筆

O : ①龍年第六月

P : ①鵝年第四月の②初(旬の)五日に。(私) トンガ=アルスラン=シャーが，たわむれに書いた。

【語註】

P2, 戲筆: この漢字2字と直接に関係がありそうな漢文題記銘文は周辺に記されていない。従って，この漢文はウイグル語銘文の筆者トンガ=アルスラン=シャー (tonga-ǰars[la]n-ša) が記したものと考えられる。

なお，漢文仏典の裏面や余白を再利用したウイグル語の題記には，irikip bitidim 「私は退屈して (v. irik-) 書いた」という表現が頻見する [Porció 2014, 165; Zieme 2016, 65]。本処の「戲筆」は，「(退屈しのぎに) たわむれに書いた」という文脈で理解し，Uig. irikip bitidim 「私は退屈して書いた」に対応させられるかもしれない。

Text Q

第7層西南面，回廊内壁南側，第5行の斜体の校訂テキストは，縦書きされたシリア文字シリア語である。

Q1 kǘskǘ yil t[o]quzunč ay yeti otuz-qa

Q2 [bi]z pilipoz • yušimut • qırqız? y-a-či b(ačay?)

Q3 [mon]gol?-tay munčayü bo suburyan-ni körgäli

Q4 (kälü?) taginip bitiyü tagintimiz čin'ol

Q5 (...)yn w(...) lš(...) 'bdk pyl(ypps)

Q6 P(..)V?

①鼠年九月二十七日に、②私達ピリポス、ユシムト、キルクズ(?)弓手(?), バチャグ(?),
③モンゴルダイ(?), このような者達が、この塔を観るために④ [参] 詣して書き奉つた。(これは) 真実である。

⑤……………あなたのしもべ、ピリポス ⑥……………

【語註】

Q2a, pilipoz: Syr. *pylypws* [pīlīpōs] (< Gr. Φίλιππος “Philip”) に由来するキリスト教人名。この人名は、シリア文字テュルク語墓誌ではセレウコス暦紀年を表記する際の *pilipos xan oyli al(e)ks(a)ndros elig xan saqiši* 「ピリポス王 (2世, r. 382–336 BC) の息子アレクサンドロス国王の紀年」などという表現で頻出するが [Borbone 2008a, 6; MCMRQ, 162–164, 194, 196, 205, 211], ウイグル文字形式 *PYLYPWZ = pilipoz* は本処で初めて在証される⁽⁸⁾。

Q2b, yušimut: 「日曜」を意味する中世イラン語 (パルティア語 *‘ywšmbt ~ ‘yw šmbt* [ēwšambat], もしくは中世ペルシア語 *ykšmbd* [yekšambad]) から、ソグド語 *‘ywšmbyd ~ ywšmbd* を経由してウイグル語に借用されたものと考えられる。ウイグル語文献には *yušimut* の他、ソグド語に近い *ew-šmbd*, さらに *yušumuđ ~ yušumbut* などの形式も在証され、モンゴル時代の漢文資料では要東木～葉失謀～岳石木～岳出謀 (< **yučumut < yušumut*) などと音写される。Zieme による詳細な検討を参照せよ [Zieme 2015, 188–191]。

Q2c, qīrqīz: ブライク出土ウイグル語文献に人名 (原義は「40, 四十」) としての在証例が確認される [Zieme 2015, 184]。ただし本処の語末字は, -Z にしては末尾がやや長い。これを -N と読むのであれば, 語頭も Š- に改めて, キリスト教人名 *šY[M]XWN = šimyun* (< Syr. *šm‘wn* [šem‘ōn]) 「シメオン」と読み替えるべきかもしれない [cf. Zieme 2015, 186]。

Q2d, y-a-či: ~ *yači* 「弓手, 弓職人」 [ED, 882]。本処では Y-’ ČY と変則的に綴られている。直前の人名キルクズ (*qīrqīz*) の称号とみたが, ヤチ (*yači*) という別人の名かもしれない。

Q3, [mon]gol-ṭay: このモンゴル語人名 (~ Mong. *mongyoldai*) の推補が正しければ, モンゴル時代への年代比定の挙証となる。

Q4, kälü: この部分は壁面が摩滅しているが, 文脈から推補した。

Q5, (...)*yn w(...)* lš(...) ‘*bdk pyl(y)ws*) : このシリア語銘文の解読については, 高橋英海教授 (東京大学) よりご教示を頂戴した。さらに高橋教授からは, 我々の手許の写真はそれほど鮮明ではないため, ‘*bdk* [‘abdāk] 「あなた (= 神) のしもべ」に先行する部分は完全には判読できないものの, (...)*yn w(...)* は (‘*m*)*yn w(hyl)* 「アーメン, そして, 力づけたまえ」と推補して, 「アーメン, そして, あなた (= 神) のしもべピリポス……………を力づけたまえ!」というような文脈を期待できるかもしれない, とのご教示をあわせて頂戴した。まことに卓見であり,

⁽⁸⁾ なお, Zieme はトゥルファン出土キリスト教関係ウイグル語文書 U 330 にみえる *PYRYP* を *PYLYP = pilip* の誤記とみて, 人名 Philip に関連させている [Zieme 2015, 73]。

特記して深謝する。

なお、人名ピリポス (pylypws [pīlīpōs]) も、後代の墨書によって上書きされているため不鮮明ではあるが、第2行のウイグル語題記で巡礼者として言及される pilipoz と同一人物とみてよかろう。

Q6: 前行の人名 pylypws の右隣の位置に、ウイグル文字で単語が一つ書かれているようにみえるが、遺憾ながら十分に判読できない。

Text R

第7層西南面，回廊内壁南側中央部分。Text Q の西＝左下。Text I と同様に，銘文の上から補修剤が塗布されたため，全体的に白く見える。

- R1 luu yīl ikinti ay beš otuz-qa
 R2 (...) qy-a bolat yīymīš üčägü bo suḍup
 R3 -qa yuq(üng)äli kälip ayḍinip? yuḱünüp täğsinip
 R4 (ba)rdimīz bo buyan küčün-tä burxan bolalīm

①龍年第二月二十五日に。②(私達)……=カヤ，ボラト，イグミシュの3人が，この塔に③礼拝しに来て，(塔に)登って(?)礼拝し，圍繞して④出発した。この福德により，私達が成仏しますように。

【語註】

R2, suḍup: stup (<Skt. stūpa) 「塔」の異形とみる。Cf. 語註 J5.

R3, ayḍinip: <v. ayḍin- 「登る」。ただし，この解読は暫定案である。

R4a, (ba)rdimīz: 石窟寺院などへの参詣や滞在を終えて「出発する (v. bar-)」「帰る (v. yan-)」際に題記を記す，という文脈は，ウイグル語題記銘文に頻見する [e.g., Hamilton / Niu 1998, 131, 139, 142, 158; Matsui 2008b, 22, 25; 松井 2013a, 35].

R4b, burxan bolalīm: ウイグル語仏典識語類にも，仏典の翻訳・書写あるいは読経などの功德により「成仏する」ことを祈願する表現 (burxan bolayin ~ bolalīm ~ bolzun) は散見する [BT XXVI, 48, 57, 64, 150, 167, 219].

Texts S, T

第7層北面，回廊内壁下段（藏経閣北入口西側）。筆致や年月の相違からみて，第1行と第2-9行は明らかに別人が記したものである。前者を Text S, 後者を Text T とする。

- S1 t(a)v(i)šy[an] yil y[et]in[č] ay y[eti] (y)ang[iqa] män käl(i)p bi[tidim]
 T1 bečin yil säkšinc ay säkiz yangi-ta
 T2 yükün(gü)lük tägšingülük vaxar-ta ayay? olurup
 T3 bitiyü tägindim kenki körgülük bolşun
 T4 män čam baliq-lıy äsän biđitim čin [o]
 T5 yamu alqu? biraman?-lar-nıng körgülüki?
 T6 adruq? adruq? dinđar-lar-nıng y(üküngülü)ki?
 T7 a(rı)γ? maxa[ya]n? nom-lar-nıng soq-a? öşdöz-i?
 T8 ary-a mančuširi-qa yükünürmän

S : ①兔年第七月初（旬の）七日に、私が来て [書いた].

T : ①猿年八月初八日に、②礼拝し圍繞すべき寺に、崇敬（のために(?)）滞在して
 ③書き奉った、後人が見るものとなりますように、④私、チャムバリク出身のエ
 センが書いた、（これは）真実なので⑤ある。

すべての(?)婆羅門(?)たちが見るべき(?)

⑥種々の(?)僧たちが礼拝すべき(?)

⑦清浄なる(?)大乘(?)の諸經典のまさしく(?)自性たる(?)

⑧聖文殊師利に、私は礼拝する。

【語註】

T2: Uig. tägšingülük < v. tägzin- 「圍繞する」という表現については、前掲語註 J6 参照。この「礼拝し圍繞すべき寺 (vaxar)」は、Text M の「塔寺」と同様、白塔・宣教寺を総称するものであろう。ayay 「崇敬」は不鮮明で、文脈からも十分に解釈できない。後考を俟つ。

Uig. v. olur- (> olurup) 「坐す；滞在する」という表現は、敦煌石窟のウイグル語題記銘文では、多くの場合、宿泊を伴う中長期の滞在を示す文脈で用いられるようである：莫高窟第 217 窟、män buyan qay-a sügčü baliq-tin kalgali üç yil bolup barmadin bo tay aranyadan araqi vaxar qy-a olurup 「私ブヤン=カヤは、肅州城から来て 3 年になっても出発せずに、この山阿蘭若の中の寺に滞在して」⁽⁹⁾；榆林窟第 12 窟、on kün dyan olurup bardimiz 「私たちは 10 日間の禅定に坐して (=滞在して) 出発した」[Hamilton / Niu 1994, 131-132].

T3, kenki körgülük bolşun: 題記が後人 (kenki) により見られることを祈念する文言は敦煌石窟のウイグル語銘文でも頻見するが、多くの場合 kenki körgü bolzun 「後人が見るべきものとなれ」あるいは kenki körgü ödig bolzun 「後人が見るべき記念となれ」という表現が用いら

⁽⁹⁾ この題記銘文については、Pelliot 蒐集写真により Kara が解説を試みているが [Kara 1976]、筆者らの実見調査に基づき修正する。

れ、本処の körgülük は珍しい。

T4, čam baliq: この地名チャムバリクは、トゥルファン出土のウイグル語文書 Ch/U 7325v にも在証され [SUK 2, 83–84; VOHD 13,21, #83], またモンゴル時代のカンクリ (Qangli > 康里) 族出身の文人官僚で『亦都護高昌王世勲碑』ウイグル文面の作者キキ (Kki-Kki ~ Käki > 巒巒) も「本貫地」として明記する [cf. Zieme / 百濟 1985, 36–42; 中村健太郎 2007, 93–94]. 11世紀のカーシュガリー (Maḥmūd al-Kāšgarī) 『テュルク語辞典 (*Dīwān Luġāt al-Turk*)』では ĞANBALYQ = Ğānbālīq, モンゴル時代の小アルメニア王ヘトゥム 1 世の旅行記では Ğanbalex, 漢籍資料では彰八里 ~ 昌八刺 ~ 參八里などと表記される。現在のウルムチから西北約 30 km の昌吉市に比定される。[佐口 1943, 12; 安部 1955, 476; Hamilton 1958, 147; 松田 1970, 423–425; CTD I, 140; Boyle 1964, 182].

T5–8: Peter Zieme 教授から、本銘文の alqu 「すべての」以降の部分と類似するテキストがトゥルファン出土ウイグル語仏教頭韻詩の断片 Ch/U 7118v に見出されることをご教示いただいた： kertgünč-lüg tīnlīy-lar-nīng yūkūngülūki / kinayan m(a)xayan nom-lar soqa öz tözi / kirsiz arīy mančuširi-qa yūkūnūr-biz 「信心ある衆生が礼拝すべき / 小乗・大乘諸経の自性たる / 無垢清浄の文殊師利に我らは礼拝する」 [BT XIII, 146, Nr. 32]. 本銘文でも、alqu 以降が /a/ による頭韻四行詩を構成していると考えられる。以下の語註も参照。

T5, bīraman?: ~ braman ~ bramin < Skt. brāhmaṇa 「婆羅門」。ただし、あくまで試読である。

T6, adruq? adruq? dīnḍar: 行頭の adruq adruq 「種々の」は暫定案である。後続の dīnḍar ~ dīntar は Sogd. ḡyndʾr 「宗教を保持する者」の借用語で、元来は主にマニ教僧侶を意味したが、後には仏僧やキリスト教僧侶をも意味するようになった [Zieme 1978, 31; BT XIII, 211; 森安 1991, 92–93]. 本銘文が、仏僧を意味する一般的なウイグル語 toyīn ではなく dīntar の語を用いるのは、ムスリム (Texts A, D) やキリスト教徒 (Texts C, P) もフフホト白塔に参詣していたことを意識したものかもしれない。第 3 章の考察も参照。

T7, a(rī)y? maxa[ya]n? nom-lar-nīng soq-a? öşḍöz-i?: この行は「諸経典 (nom-lar)」を除いて十分に判読できない。先行部分はウイグル語仏典に散見する arīy maxayan nom-lar 「清らかな大乘 (maxayan < Skt. mahāyāna) の諸経典」という表現 [e.g., BT XIII, 102, 146, 165, 219; 庄垣内 2003, 314; BT XXVI, 82] を参照して推補する。後半の soq-a öşḍ(öz)-i は、前掲語註 T5–8 に掲げた頭韻詩の用例と比較して推補する。行末の öşḍ(öz)-i は、Skt. svabhāva 「自性」に相当する Uig. öz tözi [Zieme / 百濟 1985, 146] が 'WYSDW(YZ)-Y = öşḍöz-i (~ öz tözi) と一筆で綴られているものとみなした。

T8, ary-a mančuširi: 行頭の ary-a は頭韻からも推補できる。

3. 基礎的考察

マルコ=ポーロ『世界の記 (*Le devisement dou monde*)』(いわゆる『東方見聞録』)は、テンドック (Tenduc < 天徳) すなわちフフホトはオングト王国の首府であり、その住民の大部分はキリスト教徒であるが、相当数の偶像教徒つまり仏教徒やムスリムも住民に含まれ、また仏教徒とムスリムの混血児 (argon < T. arγun) も多数あると伝える [Moule / Pelliot 1938, 181–182; 藤枝 1939, 135–137; 愛宕 1970, 161–162; 高田英樹 2013, 158–162; cf. Pelliot 1959, 48–51]. このようなモンゴル時代のフフホトの宗教文化の多様性が白塔の多言語題記銘文にも反映していることは、つとに先学により指摘されている [李逸友 1977, 59–60; 蓋山林 1991, 294].

一方、本稿で提示してきた前掲のウイグル語題記銘文テキストは、フフホト白塔を訪問してこれらを書き残したテュルク系集団の活動について、さまざまな歴史学的考察を可能にする。特に、語註の諸処に示したように、題記銘文の筆者たちのなかには仏教徒・東方キリスト教徒が確実に存在しており、またムスリムも含まれていた可能性がある。

本章では、今後の歴史学的考察の出発点として、モンゴル時代の「ウイグル仏教徒」の広域にわたる巡礼活動、またモンゴル時代フフホト周辺の東方キリスト教徒・ムスリムの存在、さらにはこれらの諸宗教の共存に関して、これらのウイグル語題記銘文から得られる情報を整理しつつ、関連するウイグル語・テュルク語史料とも比較検討しておく。

(1) ウイグル仏教徒の巡礼圏

本稿で提示した題記のうち Texts E, J, K, L, T は、天山東端の重要都市ハミ (Qamīl > 哈密) や、トゥルフアン盆地西端のオアシス都市であるトクシン (Toqsin), 天山北方のチャムバリク (Čam-Balıq) など、いわゆるウイグルistan (Pers. Uygūrīstān) すなわち東部天山地方のウイグル王国領に属する諸城市の出身者 (あるいはその子孫) により記されたものであった [語註 E1, J2, K1, T4 参照]. また、これらの題記の筆者には、阿闍梨 (ačari) 号をもつ仏僧 (Texts E, J) や、沙弥 (> Uig. šabi) すなわち見習い僧 (Texts K, L) が含まれていた。これらの題記銘文の筆者がいわゆる「ウイグル人」であったことは確実であり、また彼らは東部天山地方とフフホトを結んで仏教巡礼活動を行っていたものとみなすことができる。

一方、これまでに筆者らは、敦煌石窟のウイグル語題記銘文の調査成果によりつつ、モンゴル時代の東部天山地方から甘粛・河西・寧夏を経て山西の五臺山 (Uig. uday) にまで及ぶウイグル仏教徒のネットワークを解明してきた [Matsui 2008b, 27–29; 松井 2013a, 38–44; 松井 2014, 36–39; 松井 2015c, 218–222]. このような巡礼ネットワークと、フフホト白塔のウイグル語題記銘文にみえるウイグル仏教徒の巡礼活動は、明らかに接続・重層するものと考えられる⁽¹⁰⁾.

⁽¹⁰⁾ モンゴル時代の「西夏路 (Uig. tangut čölgä)」つまり西夏中興路・寧夏府路から敦煌莫高窟へのウイグル仏教巡礼の実例が確認されており [松井 2013a, 銘文 4D, 4E; 松井 2015c, 218–220], またフフホト白塔にも「大元中興府在城僧」が記した漢文題記が見出される [李逸友 1977, No. 103]. マルコ=

上述の Texts E, J, K, L, T を除くと、フフホト白塔のウイグル語題記銘文の筆者たちの出身地や「民族」的出自を直接に明示する情報は得られない。従って、彼らが「民族」的に「ウイグル人」であると断定することには慎重とならねばならない。周知の通り、モンゴル帝国の支配下には、ナイマン・オングト・カルルクなどウイグル以外のテュルク系諸集団が広汎に存在しており、チンギス時代にモンゴル帝国の公用字として採用されたウイグル文字は、彼らの間でも頻用されたからである（この点は後述する）。

ただし、例えば、Texts B, R の筆者は、「この塔の上(層)の最上の(?)諸仏の力により (bo suburyan üstün-ki baš? yeg? burxan-lar-niŋg küčin-gä)」(Text B₃₋₅) や「この福德により、私達が成仏しますように (bo buyan küčin-tä burxan bolalim)」[語註 R4] といった仏教信仰を反映する文言を用いている。また、Skt. vajra に由来する vačra ~ vačr-a という人名を有する Text H の筆者も、仏教文化に属していたことは確実である。文量の少ない題記銘文から即断はできないが、これらの銘文の書式や語法・用語を、トゥルフアン・敦煌のウイグル人による仏教文献や題記銘文と比較しても、極端な相違点は見出せない。フフホト白塔のウイグル語銘文の筆者たちの仏教信仰・仏教文化は、「ウイグル人」仏教徒と共通していたものと考えられる。モンゴル帝国支配層の仏教文化の受容や保護・支援に際して、ウイグル王国出身の仏教徒が大きな役割を果たしたことは周知の通りであり、モンゴル時代の集団名としての「ウイグル」は「仏教徒」一般を指して用いられる場合もあった [DeWeese 1994, 88-89; 濱田 1998, 118]。このような状況に鑑みれば、フフホト白塔にウイグル語の題記銘文を残したテュルク系仏教徒についても、「仏教徒」としての「ウイグル」に包摂することが、ひとまず承認されるであろう。

東部天山から甘粛・河西を経て東方へ広がるウイグル仏教徒の巡礼圏の考察にとって、これだけの量のウイグル語題記銘文がフフホト白塔に確認されることは興味深い。特に、松井が旧稿 [松井 2014, 36-40] で紹介したような、敦煌から文殊菩薩信仰の仏教聖地である山西の五臺山へと巡礼するウイグル仏教徒たちは、河西回廊を寧夏まで東進するか、もしくは肅州あたりから北行しゴビ砂漠を東進して、そこから陰山南麓・フフホトに向かって白塔に参詣し、さらに五臺山へ南下したという巡礼ルートが存在が想定される⁽¹¹⁾。本稿 Text T には文殊菩薩を讃える頭韻詩が含まれており、それがトゥルフアン出土のウイグル語頭韻詩と類似する構成を

ポーロ『世界の記』も、エグリガイア (Egrigaia < Mong. Eri-Qaya) = 寧夏に続けてテンドウク (Tenduc < Chin. 天徳) = フフホトについて記録しており [愛宕 1970, 160-164; 高田英樹 2015, 157-163]、当時の交通事情において寧夏とフフホトが直近するものと認識されていたことを示唆する。

(11) ちなみに、杏雨書屋所蔵の敦煌漢文書「駙程記」(羽 032) は、850 年代前半に敦煌帰義軍政権から派遣された公使節団(「沙州専使」)が、陰山南麓の黄河の左岸に沿ってフフホトの南西を通過し、山西の振武軍から雁門関へ向かったことを示しており、敦煌から陰山・フフホト地域を経由する交通路の状況をうかがわせる [高田時雄 2011; 齊藤 2014, esp. 73-74, 80; cf. 白玉冬 2016, 85-86]。なお、五臺山は雁門関から東方わずか 60 km に位置しており、高田時雄は問題の使節団が五臺山巡礼の一つの目的としていたと考えている [高田時雄 2011, 8-11]。

もつこと〔語註 T5-8 参照〕も、東トルキスタンから敦煌のウイグル仏教徒に流行した文殊信仰・五臺山信仰との関係を推測させる。

もちろん、フフホト白塔に題記を遺したウイグル仏教徒が全て五臺山へと南下したと考える必要はない。白塔の漢文題記銘文は、モンゴル高原の旧都カラコルムや内モンゴル・寧夏の諸都市さらには漢地（陝西・山西・河北・山東）からも仏教巡礼者が白塔を訪れていたことを示す〔李逸友 1977, 58-61〕。ウイグル仏教巡礼者たちのなかには、そのまま東進して大都・上都へと向かう者、あるいは白塔の漢文題記に記されたような各地への巡礼路・商業路を辿った者もいたであろう。

（2）東方キリスト教徒とウイグル語題記銘文

既述のように、白塔には計 12 条のシリア文字テュルク語題記銘文が確認されており、仏教施設としての白塔と東方キリスト教徒との相互関係を考察するうえで貴重な資料となる⁽¹²⁾。ただし、このうち 7 条はセルギス（T. *sārgis* < Syr. *srgys* [*sargīs*]）という名の同一のキリスト僧（Syr. *qšyš'* [*qaššīšā*]⁽¹³⁾）、また 2 条はそれとは別人ながら同一人物の手になるものであり、またいずれの題記も定型的な内容をもっていた⁽¹⁴⁾。すなわち、シリア文字テュルク語題記銘文による限り、白塔を訪問するテュルク系東方キリスト教徒がせいぜい 2, 3 名の例外的・突発的存在であった可能性を否定できなかったのである。

これに対して、本稿では、東方キリスト教徒による題記銘文として Texts C, Q を確実にできた。本稿 Text C の筆者は、シリア語 *qwmky'* [*qūmkāyā*] に由来する東方キリスト教徒の称号 *kūmkā* 「会堂番」を有していた〔語註 C1b 参照〕。また Text Q は、ピリポス (*pilipos*)・ユシムト (*yušimut*) というキリスト教人名をもつ訪問者たちの題記であり、その末尾（第 5 行）にはシリア文字シリア語の銘文をも伴っていた。これら Text C・Text Q で言及される訪問者たち

(12) これらの白塔のシリア文字テュルク語題記銘文の筆者について、牛汝極はオングトあるいはウイグル人とみなし〔牛汝極 2008, 23-24〕、Borbone は地理的状況からオングトの可能性が高いとする〔Borbone 2013, 57〕。

(13) Borbone は、試案と断りながら、この白塔銘文の筆者セルギスをチンギス時代のオングト王家の臣僚として、『国朝名臣事略』巻 1・太師魯国忠武王に「〔辛巳（1222）〕八月，王（Muqali）至天德，監國公主（Alaqai-Begi）遣其臣習里吉思勞王，且饗將士」と現われるセルギス（習里吉思 < *Srgīs*）に比定する可能性を指摘している〔Borbone 2008b, 498; Borbone 2013, 61-62〕。

(14) Borbone 2013, 58-61; cf. Zieme 2015, 175-176. セルギスによる題記 7 条のうち、4 条（Borbone 2013, IV.2, V.1, VI.1, VII.1）は「この略花押は私，僧セルギスのものである（*bo nišan mǎn sārgis qaššīšā-nīng ol*）」という題記，また 3 条（Borbone 2013, VII.2, VII.3, VII.4）は「しもべセルギスの言葉を唱えよ！ 知恵の主（=神？）は（全てを？）覆う。（現世に？）固執するなかれ。みな巧みに説く。我が兄弟（=イエス？）は（皆を？）動かす（*qul sārgis sözi sözlä / aqıl qanı kölitür / taqma birär uz sözlär / qaratašim yoritür*）」という頌詩である〔Borbone 2013, 59-60; Zieme 2015; cf. 牛汝極 2008, 105-106〕。また、別人による 2 条（Borbone 2013, V.2, VI.2）は「神が祝福しますように！アーメン！（*tngri qutuy qılzun amin*）」という願文である。

の人名は相互に重複せず、また既公刊のシリア文字テュルク語題記銘文とも関係を見出せない。換言すれば、彼らの白塔訪問はおのおの別個に行なわれたと考えられる。もちろん、偶然に遺存した題記の数からその頻度や人数を推定することは困難であるが、これら Texts C, Q の事例を得たことで、白塔を訪れるテュルク系東方キリスト教徒は決して限定的・例外的な存在ではなかったといえるだろう。

さらに、Texts C, Q は、テュルク系東方キリスト教徒におけるウイグル文字の使用例を新たに提供する。テュルク系東方キリスト教徒にウイグル文字が一定の浸透をみていたことは、トゥルファン地域から将来されている多数のウイグル語キリスト教関係文献 [Zieme 2015] や、西暦 1253~1254 年にモンゴル宮廷を訪れたルブルクのウィリアム修道士 (William of Rubruck) の「ほぼ全てのネストリウス教徒が彼らの文字 (=ウイグル文字) に親しんでいる」という報告 [Rubruck/JM, 157] から十分に予想される。

ただし、タリム盆地より東方の地域に限ってみれば、テュルク語東方キリスト教文献の大多数はシリア文字を使用しており⁽¹⁵⁾、ウイグル語 (=ウイグル文字テュルク語) による東方キリスト教関係資料は①松州城址発現 1253 年ヨナン墓誌 [語註 C1b 参照]、②オロン=スム (Olon-Sume) 発現泰定四年 (1327) 漢文・シリア文字テュルク語・ウイグル語三体合璧墓誌 [牛汝極 2008, 67-72]、③泉州発現 1331 年ウイグル語墓誌 [Hamilton / Niu 1994, II; 呉文良・吳幼雄 2006, 384-387; 牛汝極 2008, 156-158; MCMRQ, 131-133, B23]、の 3 点に限られていた。このうち、③の女性墓主の夫は「高昌出身 (qočo-luy)」つまりウイグル人のキリスト教徒とみなされるが [松井 2016, 288-289]、①の墓主ヨナンは、張佳佳・馬曉林の考証 [語註 C1b 参照] によればアルマリク出身であるからカルルク (Qarluq) 族出身であった可能性が高く⁽¹⁶⁾、また②の墓主アブラハム=トムレス (Uig. abrx(a)m tömüräs > Chin. 阿不刺編帖木刺思) は、墓誌の出土地に鑑みればオングト族出身と考えられる [蓋山林 1991, 271-272]。この①・②は、狭義の「ウイグル人」以外のテュルク系キリスト教徒にもウイグル文字が普及していたことを示唆する⁽¹⁷⁾、特に、『詩編』をシリア文字シリア語で引用しつつ、墓誌本文ではウイグル語を使用する墓誌①は、ユーラシア東半のテュルク系キリスト教徒の典礼言語(シリア語)と日常語(ウイグル文字テュルク語)の使用実態を示すものとして特筆されている [Borbone 2005, 17; cf. S. M. C. Lieu *apud* MCMRQ, 39-40]。

その点で、白塔訪問の記念として書き残された本稿 Texts C, Q も、ウイグル人を含むテュル

(15) テュルク系キリスト教徒におけるシリア文字使用については、Klein 2002 および中村淳 2008, 72-75 も参照。なお、東方キリスト教徒の用いるテュルク語は、シリア文字で書かれたとしても「ウイグル語」と称してよいという見解もある [Dickens 2014, 402]。

(16) ただし、張佳佳は、①のヨナン一族の「民族」的出自の特定を留保している。なお Borbone 2008a は、内モンゴル所在のテュルク語資料はおおむねオングト族に属するとみる。

(17) ①の墓主ヨナンの子孫アルタン=ブカ (Altan-Buqa > 按檀不花) が「畏吾兒 (Uyğur) の文字・言語を識會する」と伝えられることも留意される [張佳佳 2011, 42]。また、cf. Dickens / Zieme 2012, 349。

ク系東方キリスト教徒の“より”日常的な書写文化としてのウイグル語使用を反映するものといえるだろう。

(3) ムスリムとウイグル語題記銘文

モンゴル時代に白塔を訪問するムスリムの存在も、つとに李逸友・蓋山林によって推測されている [李逸友 1977, 59–60; 蓋山林 1991, 312]。その論拠は、「回回」すなわちムスリムによる漢文題記「曲^回在城回回一人宋吉」(李逸友 1977, No. 211) と、第4層・第7層の「古波斯字; 古波斯文」つまりアラビア文字・ペルシア語の題記であった。ただし、当該の漢文題記は紀年を欠き、またアラビア文字・ペルシア語題記も解読されていないので、これらの題記がモンゴル時代のムスリムに由来するという客観的な証拠は提示されていない。

ここで、本稿 Texts A, D にスライマン (sul(a)jman < Ar.-Pers. sulaymān) ・ウトマン (uđman < Ar. uṭmān ~ Pers. ušmān) というムスリム人名が確認されたことは重要である。題記の文脈に鑑みれば、これらは、白塔を訪問した題記の筆者自身の人名と考えられる⁽¹⁸⁾。もちろん、人名のみに基づいて彼らがムスリムであるとは断言はできないが、もしも彼らが実際にイスラームを信仰していたとすれば、Texts A, E は前掲の漢文題記やアラビア字題記と併せ、李逸友・蓋山林らの推測を補強するものとなる。

本稿 Texts A, D の筆者スライマン・ウトマンについては、いずれもウイグル語 (=ウイグル文字チュルク語) を用いていることから、チュルク系集団に属していたことは確実であるが、その出身地や「民族的」出自を特定するための情報は見出せない。周知のように、ウイグル文字は初期モンゴル帝国の公用字として西アジア領域にも導入されたから⁽¹⁹⁾、問題のスライマン・ウトマンが西アジア出身者だとしても、ウイグル文字の使用は不自然ではない。彼らがマルコ=ポーロ『世界の記』の伝えるようなフフホト在住のムスリムであれば⁽²⁰⁾、周辺のウイグル仏教徒との接触を通じてウイグル文字に通曉し得たであろう。

もっとも、『世界征服者史 (Tārīḥ-i Ġahāngūšā)』は、第4代皇帝モンケの即位 (1251) 前後にウイグル王国の夏都ベシュバリク (Beš-Baliq > 別失八里, etc.) で金曜礼拝に集まるムスリムの虐殺が企てられたといい [TĠ/Boyle I, 48–49; 佐口 1943, 74; 安部 1955, 38–39; Allsen 1983, 250–251]、またモンゴル時代のウイグル語社会経済文書にはムスリム人名も少なからず確認さ

(18) 敦煌石窟のウイグル語・モンゴル語題記銘文に記される人名は、題記の筆者・同行者だけでなく、直接には石窟を訪れていない関係者たち (領主・主君, 家族・親族など) に言及することもあった。Matsui 2008b, 23, note J4; 松井 2013a, 37–38; DhY / NMSfdx, 8, No. 02.

(19) モンゴル帝国の西アジア・イラン支配におけるウイグル文字・ウイグル語の浸透については、Matsui/Watabe 2015, 43–44 及びそこに引用される文献を参照。

(20) 『元史』巻190・贈思 (Šams) 伝にみえる彼の祖父ルクン (Rukn > 魯坤) は、「大食 (Tāzīk) 國」すなわち西アジアからモンゴル時代に豊州=フフホトに移住したムスリムの例となる。

れる⁽²¹⁾。すなわち、仏教文化が優勢であったウイグル王国にも、モンゴル時代には相当数の「ウイグル人」ムスリムが存在していたことが示唆され、Texts A, D のスライマン・ウトマンもその一員であったかもしれない。

(4) 題記銘文にみえる諸宗教徒の活動

前述してきたように、本稿で提示したウイグル語題記銘文のうち、Texts B, E, H, J, K, L, R, T の筆者は仏教徒、Text C, Q の筆者は東方キリスト教徒であることが判明し、また Text A, D の筆者はムスリムの可能性が高い。彼らは、宗教信仰を異にしつつも、ウイグル語 (=ウイグル文字テュルク語) 書写文化を共有するとともに、またフフホト白塔を訪問するという活動も外形的には共通しているといえる。

ウイグル仏教徒の白塔参詣は、当然、彼らの仏教信仰を身体動作化した宗教実践とみなすことができる。仏教施設としての白塔に対する彼らの崇敬は、彼らが白塔訪問時の行動を「礼拝する (yükün-)」(Texts E₃, J₅, R₃, T₂, T₈)、「圍繞する (tägzin-)」(Texts J₅, R₃, T₃) と称することや、また本章 (1) で指摘したような仏教信仰を反映する文言からも看取される。

また、白塔のシリア文字テュルク語題記銘文を記したテュルク系東方キリスト教徒たちは、願文や記念の題記を残す仏教徒の慣行を単に模倣したものと考えられていた [Borbone 2013, 61]。確かに、本稿で新たに提示したキリスト教徒によるウイグル語題記 Texts C, Q も、構文や用語の上ではウイグル仏教徒の題記銘文と大差はみられないといえる。しかし、Text Q のキリスト教徒たちは「この塔を観るために (bo suburyan-ni körgäli)」白塔を訪問したといい、彼らの白塔訪問が積極的・意図的なものであることがうかがえる。また、同じく Text Q にみえる訪問者の一人ピリポス (pilipos ~ pylypws) がシリア語で「あなた (=神) のしもべ」と称していることや、既発表のシリア文字テュルク語題記 (Borbone 2013, V.2, VI.2) の「神が祝福しますように！アメン！ (tngri qutuıy qılzun amin)」という文言は、仏教施設としての白塔を訪問し、その高層に登攀して題記を残すことが、彼らのキリスト教信仰と背馳するものでなかったことを示している⁽²²⁾。

(21) 仏教徒とおぼしきサンガダス (sanggadaz << Skt. saṃghadāsa) がムスリム人名をもつムバーラク=ホージャ (mubarak-xoča < Ar. mubārak ḥwāḡa) を買い取った際の奴隷売買契 SUK Sa26 は、ウイグル社会における仏教徒とムスリムの接触を示す顕著な例といえる。その他、契約文書の当事者・関係者として、maxmat (†mamat < muḥammad, SUK WP04), mišir (< Ar. mišr), qiyasudīn (< Pers. ḡiyāš al-dīn), sulḡan (< Ar. sultān), umar (< ʿumar), irasul (< rasūl), sulayman (< sulaymān) などが確認される [SUK II, Wörteverzeichnis; 松井 2004, 162], また契約文書ではなく書簡 (あるいは行政命令) である U 5331 の差出人の一人は tačudīn < Ar. tāḡ al-dīn というムスリム人名をもつ [Clark 1975, 167; Sertkaya, A. G. 1999, 244; VOHD 13,21, #31].

(22) なお、榆林窟第 16 窟にも、瓜州 (qaču) 出身のテュルク系東方キリスト教徒が「跪拝して (sökünüp < v. sökün-)」酒・羊を奉納した、という内容のシリア文字テュルク語題記銘文が残されており [cf. 松井 2016, 289-290; Zieme 2015, 24], キリスト教徒と仏教信仰との親和性が示唆される。この題記銘文

一方、Texts A, E がムスリムによる題記であった可能性については前述した通りであるが、その乏しい文面からは、彼らのイスラーム信仰や、また仏教施設としての白塔訪問に対する認識はうかがえない。

ただし、本稿で提示したウイグル語題記銘文にみえる巡礼者・訪問者の人名・称号から判断する限り、一つの題記で同時に仏教徒・東方キリスト教徒・ムスリムが言及される例は確認できない。この点に鑑みれば、白塔訪問に際して、各教徒は互いに混淆しない別々のグループを構成していたと推測される。これは、それぞれの信仰にとっての白塔訪問・参詣の宗教的意義に本質的な相違があったというものを反映するであろう。特に非仏教徒にとっては、白塔はあくまでも「観光名所」に過ぎなかったことも十分に考えられる。この点で、マルコ=ポーロ『世界の記』が述べるような、仏教徒とムスリムとの「混血児」についても、その実例となりえるような情報は本稿で示したウイグル語題記銘文には見出せないことになる。

無論、本稿で提示したウイグル語題記銘文の全てが、宗教信仰を主要な動機とする巡礼者・参詣者によって記されたと考える必要はない。モンゴル時代のフフホト=豊州は交通の要衝として商工業が発展し、内モンゴル地域では屈指の経済都市となっていた [藤枝 1939, 144]。一方、東部天山から甘粛河西回廊を結ぶウイグル仏教徒の広域巡礼ネットワークは、商業交易と密接に結びついていたと考えられる [松井 2008a, 37-41]。本稿で提示した白塔のウイグル語題記銘文には、直截に商業交易との関係を示す情報は見出せないものの、白塔を訪れるウイグル仏教徒・東方キリスト教徒・ムスリムが、このような商業的なネットワークとも関係していた商人であった可能性も考慮すべきであろう⁽²³⁾。

さらに、モンゴル時代の豊州城内・近郊には、白塔を擁する「宣教寺」の他にも定林禅寺・大永安寺（及びその「下院」の三聖寺）・崇□禅寺・大宗寺など、複数の仏教寺院が存在した。特に定林禅寺と大永安寺の住持は、いずれもオングト王家当主により任命され、寺宇の重修・整備や教団の発展に尽力したという [蓋山林 1991, 302-309; 李逸友 1996]。フフホト=豊州の仏教寺院の繁栄には、前述のような当地の商工業の発展とともに、東方キリスト教を奉じるオングト王家の庇護も不可欠であったに相違ない。フフホト白塔の訪問者については、オングト王国支配層から白塔・宣教寺への賜与その他の目的のために派遣された公的使節であり、それゆえにキリスト教徒やムスリムが含まれていたという事情も想定できる。

いずれにせよ、題記銘文の断片的な情報による限りでは、現時点で結論を提出するのは性急である。より多面的な歴史背景への位置づけが必要である。

については、松井が別稿を準備している。一方、トゥルファン地域においては、ウイグル仏教徒とキリスト教徒の接触は日常的・表面的なものであり、相互の宗教的・教理的な影響や融合は見出されていないという見解も提示されている [e.g., Zieme 2011, 179-180]。

(23) なお、白塔の漢文題記でも、「般陽路長山□客□大使路順道因□到此」、「河東太原府石州客人一行七人王二等到此」 [李逸友 1977, Nos. 520, 706] などは、客商の活動に関連づけられるかもしれない。

おわりに

以上、本稿では、合計 21 条のフフホト白塔のウイグル語題記銘文の校訂テキストを提出するとともに、そこから導き出せる情報に基づき、ごく初歩的な歴史学的考察を提示した。

今後は、ウイグル仏教徒・テュルク系東方キリスト教徒・テュルク系ムスリムの「共存」の実態、すなわち各宗教・信徒間での日常的接触や交流、さらには教義上・教理的な影響関係や相互対立の諸相の解明が求められよう。この問題については、近年活発化している、トゥルフアン・敦煌出土の東方キリスト教諸言語文献や、モンゴル時代の東方キリスト教会史研究の成果をも比較参照して検討する必要がある。

また、フフホト白塔には、なお未解読・未刊行の諸言語題記銘文が遺存する。ウイグル語銘文にも、本稿で扱った 21 条以外にも数条、ごく断片的なものがある。一方、本稿では割愛したウイグル文字モンゴル語題記は、その大部分はおそらく 15 世紀以降に属すると考えられ、ウイグル語題記とあわせてフフホト白塔をめぐる仏教文化を考察するための材料となろう。さらに、契丹語・女真語題記の存在も特筆されてはいるが、十分な解読成果はなお得られていない。本稿で提示したウイグル語題記が、これらの諸言語題記銘文の総合的分析に資することになれば幸甚である。

ウイグル語語彙

ačari	阿闍梨 (< Toch. ašari < Skt. ācāryā) E2, J1, J3	baš	頭, はじめ, 第一の; バシュ (人名) B2, B4?
adruq	種々の T6?	bečin	猿, 申 K3, T1
aydīn-	登る R3	ber-	与える J5
aldmīš	アルトミシュ (人名) B1	beš	五, 5 J1, P2, R1
alqu	全ての T5	bir	一, 1 K2
altīnč	第六 C2, J1, O1	biraman	婆羅門 T5?
aram	正月 K3	birlä	～とともに F3?
arīy	清浄な T7?	biti-	(~ biđi-) 書く, 記す A1, C1, G1, H1, I3, K2, N3, Q4, S1, T3, T4
arslan	アルスラン (人名) P2	biz	私達 B3, J1, Q2
ary-a	聖なる (< Skt. ārya) T8	bo	これ, この A1, B1, B3, J5, L4, M5, N1, Q3, R2, R4
atly	～という名の F1	bol-	なる K2, R4, T3
ay	月 C2, I2, J1, K3, O1, P1, Q1, R1, S1, T1	bolat	ボラト (人名) R2
ayači	アヤチ (人名) B1, B5	buqar	寺 F3? M5?
ayay	尊敬 T2?	burxan	仏 B4, R4
ädgü	良い; 善 F2	buyan	福德; ブヤン (人名) J3, J4, K1, R4
äsän	エセン (人名) T4	büčäk	ブチェク (人名) N2
bačay	バチャグ (人名) Q2?	čam baliq	チャムバリク (地名) T4
baliq	都市, 城市 T4	čay	チャグ (人名) B1, B5
bar-	行く, 出発する R4	čin	真実 (< Chin. 真) Q4, T4

dindar	(= dintar) 僧侶 (< Sogd. <i>ḍynḍ'r</i>) T6	säkiz	八, 8 B3, C2, T1
ïduq	聖なる J5	säkşinč	(= sākizinč) 第八の T1
in̄tu	インドウ (人名) I2	sävinč	セヴァインチ (人名) J4
ikinti	第二の R1	soqa	まさに T7
inäki	イネキ (人名) F1	stup	塔 (< Skt. <i>stūpa</i>) J5
kā	甲 (十干の一つ) I1	suburyan	塔 A1, B1, B3, L4, M4, M5? N1, Q3
kämür	不安, 憂い (< Mong. <i>gemür</i>) F2	suḍup	塔 (< Skt. <i>stūpa</i>) R2
käl-	来る J5, M5, Q4? R3, S1	sulyman	(= sulayman) スライマン (人名; < Ar. <i>Sulaymān</i>) A1
kāzig	行 K2	ša	シャ (人名) P2
kenki	後の; 後人 T3	šabi	沙弥 K1
kir	キル (人名) G1?	šal	シャル (称号; ~ Pers. <i>šāl</i> ~ Chin. 沙里/舍利 < Qit. <i>šāl</i>) B2
kiš	キシユ (人名) G1?	tapıy	供養, 奉仕 J4
kör-	見る Q3, T3, T5	taqıyu	鶏, 酉 C2, P1, S1
küč	力 B4, R4	tägin-	~し奉る, 謹んで~する E3, F3, Q4, Q4, T3
külüg	キュリュグ (人名) B2	tägzin-	(= tägsin-) めぐる, 廻る, 圍繞する J5, R3, T2
kümkä	会堂番 (< Syr. <i>qwmky'</i>) C1	tep	~と, ~と云って B5? K2
küskü	鼠, 子 G1, I1, Q1	toyrıl	トグリル (人名) C1
luu	龍, 辰 J1, O1, R1	tonga	トンガ (人名) P2
mančuširi	文殊師利 (< Skt. <i>mañjuśrī</i>) T8	toqsın	トクシン (地名; < Chin. 篤新) K1, K4
maxayan	大乘 (< Skt. <i>mahāyāna</i>) T7?	toquzunč	第九の Q1
män	私 A1, B1, B2, B3, B5, C1, E1, F1, G1? I2, K4, L4, N2, S1, T5	tört	四, 4 K3
mongol-ṭay	モンゴルダイ (人名; < Mong. <i>mongyoldai</i>) Q3?	törtünč	第四の I2, P1
munčayu	このようなものが一緒に Q3	tuñuq	人名 B2
nom	法; 経典 B5? T7	tükä-	全うする, 終える D3
ol	~である (繫辞) F2	uḍmañ	ウトマン (人名; < Ar. <i>Utmān</i>) D4
olur-	滞在する N3, T2	üč	3, 三 G1?
on	10, 十 G1?	üčägü	三人で R2
otuz	三十 C2, K3, Q1, R1	üstün	上, 上層 B4
öz	オズ (人名) C1	vačir-a	ヴァチラ (人名; < Skt. <i>vajra</i>) H1
özḍözi	(= öz <i>tözi</i>) 自性 T7?	van	ヴァン (漢語姓の音写?) G1?
pilipoz	ピリポス (人名; < Syr. <i>pylypws</i>) Q2	vaxar	寺 (<< Skt. <i>vihāra</i>) T2
qamıl	ハミ, 哈密 (地名) E1, J1	vildazun	ヴィルダズン (人名) J3
qara	カラ (人名) I3	yačī	弓手 (称号) Q2
qarša	カルシャ (人名) J1	yamu	(強調辞) K2, T5
qay-a	カヤ (人名) J3	yanga	ヤンガ (人名) G1?
qırqız	キルクイズ (人名) Q2?	yangī	(月の初旬を示す語) P2, S1, T1
qıy-a	指小辞 K1, R2	yapıl-	覆われる K2
qulī	クリ (人名) K1	yaši	ヤシ (人名) B2
quḍluy	気をもつ I1	yeg	勝れた B4?
qy-a	指小辞 K1		
sanggadaz	サンガダズ (人名; < Toch. < Skt. <i>Samghadāsa</i>) E2		

yeti	七, 7 Q1, S1	yïymiš	イグミシュ (人名) R2
yetinč	第七の S1	yušimut	ユシムト (人名; < Sogd. 'yw-šmbd < Prth. ēwšambat) Q2
ygrmi	二十, 20 J1	yükün-	(= yükün-) 礼拝する E3, J5, R3, T2, T8
yil	年 C2, G1, I1, J1, K3, O1, P1, Q1, R1, S1, T1		

参考文献目録 (ABC 順)

- 安部健夫 1955: 『西ウイグル国史の研究』 彙文堂書店。
- 愛新覺羅烏拉熙春 (Aisin Gioro Ulhicun) 2004: 『遼金史與契丹女真文』 東亞歴史文化研究會。
- Allsen, Thomas T. 1983: The Yüan Dynasty and the Uighurs of Turfan in the 13th Century. In: M. Rossabi, *China among Equals*, Berkeley / Los Angeles, 243–280.
- ATG = Annemarie von Gabain, *Alttürkische Grammatik* (3. ed.). Wiesbaden, 1974.
- 白玉冬 2016: 「沙州歸義軍政權大中五年入朝路再釋」 『内蒙古社會科學』 37-1, 83–87.
- Borbone, Pier Giorgio 2005: Some Aspects of Turco-Mongol Christianity in the Light of Literary and Epigraphic Syriac Sources. *Journal of Assyrian Academic Studies* 19-2, 5–20.
- Borbone, Pier Giorgio 2008a: Syroturcica 1: The Önggüds and the Syriac Language. In: G. A. Kiraz (ed.), *Malphono w-Rabo d-Malphone*, Piscataway, 1–17.
- Borbone, Pier Giorgio 2008b: Syroturcica 2: The Priest Särgis in the White Pagoda. *Monumenta Serica* 56, 487–503.
- Borbone, Pier Giorgio 2008c: (ed.) *Un ambassadeur du Khan Argun en Occident: histoire de Mar Yahballaha III et de Rabban Sauma (1218–1317)*. Tr. by Egly Alexandre. Paris.
- Borbone, Pier Giorgio 2013: More on the Priest Särgis in the White Pagoda. In: Li Tang / D. W. Winkler (eds.), *From the Oxus River to the Chinese Shores*, Berlin et al., 51–65.
- Boyle, John Andrew 1963: The Longer Introduction to the “Zij-i-Ilkhani” of Nasir al-Din Tusi. *Journal of Semitic Studies* 8, 244–254.
- Boyle, John Andrew 1964: The Journey of Het’um I, King of Little Armenia, to the Court of the Great Khan Möngke. *Central Asiatic Journal* 9-3, 175–189.
- Brock, Sebastian P. 1982: A Syriac Life of John of Dailam. *Parole de l’Orient* 10, 123–189.
- BT VII = Georg Kara / Peter Zieme, *Fragmente tantrischer Werke in uigurischer Übersetzung*. Berlin, 1976.
- BT XIII = Peter Zieme, *Buddhistische Stabreimdichtungen der Uiguren*. Berlin, 1985.
- BT XVI = Dalantai Cerensodnom / Manfred Taube, *Die Mongolica der Berliner Turfansammlung*. Berlin, 1993.
- BT XXV = Jens Wilkens, *Das Buch von der Sündentilgung*, 2 vols. Turnhout, 2007.
- BT XXVI = Yukiyo Kasai, *Die uigurischen buddhistischen Kolophone*. Turnhout, 2008.
- Chwolson, Daniil Abramovich 1897: *Syrisch-nesorianische Grabinschriften aus Semirjetschie*, Neue Folge. St. Pétersbourg.
- 清格爾泰 (Činggeltei), et al. 1985: 『契丹小字研究』 北京：中國社會科學出版社。
- Clark, Larry Vernon 1975: *Introduction to the Uyghur Civil Documents of East Turkestan (13th–14th cc.)*. (Indiana University, Ph.D. Dissertation). Bloomington, 1975.
- CTD = Maḥmūd al-Kāšyarī, *Compendium of the Turkic Dialects (Dīwān Luḡāt at-Turk)*, 3 vols. Tr. and ed. by Robert Dankoff / James Kelly. Cambridge (MA), 1982–1985.
- DChrSS = Nicholas Sims-Williams, *A Dictionary: Christian Sogdian, Syriac and English*. Wiesbaden, 2016.
- DeWeese, Devin 1994: *Islamization and Native Religion in the Golden Horde*. University Park (PA).
- DhSPB = 『俄羅斯科學院東方研究所聖彼得堡分所藏敦煌文獻』 全 17 冊。上海古籍出版社, 1992–2001.

- DhY / NMSfdx = 敦煌研究院考古研究所・内蒙古師範大學蒙文系 1990: 「敦煌石窟回鶻蒙古文題記考察報告」『敦煌研究』1990-4, 1-19, +5 pls.
- Dcikesn, Mark 2014: Review of MCMRQ. *Hugoye* 17-2, 395-429.
- Dickens, Mark / Zieme, Peter 2012: Turco-Syriac. In: G. A. Kiraz (ed.), *Türrāṣ Mamlā: A Grammar of the Syriac Language*, Piscataway, 346-351.
- Ecsedy, Hilda 1965: Old Turkic Titles of Chinese Origin. *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 18, 83-91.
- ED = Gerard Clauson, *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth Century Turkish*. Oxford, 1972.
- Erdal, Marcel 1984: The Turkish Yarkand Documents. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 47-2, 260-301.
- Erdal, Marcel 2004: *A Grammar of Old Turkic*. Leiden.
- 藤枝晃 1939: 「マルコ・ポーロの伝へた蒙疆の事情」『東洋史研究』4-4/5, 421-448.
- 蓋山林 1991: 『陰山汪古』内蒙古人民出版社.
- ĠT/Rawšan = Rašīd al-Dīn Faḍl Allāh Hamadānī, *Ġāmi' al-Tawārīḥ*, 4 vols. Ed. by Muḥammad Rawšan / Mustafā Mūsawī, Tihriān, 1373 AHS.
- ĠT/TS = Rašīd al-Dīn Faḍl Allāh Hamadānī, *Ġāmi' al-Tawārīḥ*. MS., İstanbul: Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi, Revan Köşkü 1518.
- 濱田正美 1998: 「モグール・ウルスから新疆へ」岸本美緒(編)『東アジア・東南アジア伝統社会の形成』(岩波講座世界歴史 13) 岩波書店, 97-119.
- Hambis, Louis 1945: *Les chapitre CVII du Yuan che*. Leiden.
- Hamilton, James 1955: *Les Ouïghours à l'époque des Cinq Dynasties d'après les documents chinois*. Paris.
- Hamilton, James 1958: Autour du manuscrit Staël-Holstein. *T'oung Pao* 46-1/2, 115-153.
- Hamilton, James 1977: Nasales instables en turc khotanais du Xe siècle. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 40, 508-521.
- Hamilton, James / Niu Ruji 牛汝極 1994: Deux inscriptions funéraires turques nestoriennes de la Chine orientale. *Journal Asiatique* 282, 147-164.
- Hamilton, James / Niu Ruji 牛汝極 1998: Inscriptions ouïgoures des grottes bouddhiques de Yulin. *Journal Asiatique* 286, 127-210.
- 呼格吉勒圖 (Hugjiltu)・薩如拉 (Sarula) 2004: 『八思巴字蒙古語文獻匯編』内蒙古教育出版社.
- 照那斯圖 (Junast) 1991: 『八思巴字和蒙古語文獻 II : 文獻匯集』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- Kara, György 1976: Petites inscriptions ouïgoures de Touen-houang. In: G. Kaldy-Nagy (ed.), *Hungaro-Turcica*, Budapest, 55-59.
- Klein, Wassilios 2002: Syriac Writings and Turkic Language According to Central Asian Tombstone Inscriptions. *Hugoye* 5-2, 213-223.
- 栗林均 2003: 『『華夷訳語』(甲種本) モンゴル語全単語・語彙索引』東北大学東北アジア研究センター.
- 栗林均 2009: 『『元朝秘史』モンゴル語漢字音訳・傍訳漢語対照語彙』東北大学東北アジア研究センター.
- Lessing, Ferdinand D. 1960: *Mongolian-English Dictionary*. Berkeley / Los Angeles.
- 李逸友 1977: 「呼和浩特市萬部嚴經塔的金元明各代題記」『文物』1977-5, 55-64.
- 李逸友 1996: 「元豊州塔銘」『内蒙古文物考古』1996-1/2, 102-106.
- 劉策 1981: 『中國古塔』寧夏人民出版社.
- 馬曉林 2016: 「元代景教人名學初探」『北京大學學報』哲學社會科學版 53-1, 134-140.
- 松田壽男 1970: 『古代天山の歴史地理学的研究: 増補版』早稲田大学出版部.
- 松井太 1998: 「ウイグル文クトルグ印文書」『内陸アジア言語の研究』13, 1-62, +15 pls.

- 松井太 2004: 「モンゴル時代の度量衡」『東方学』107, 166–153.
- 松井太 2008a: 「東西チャガタイ系諸王家とウイグル人チベット仏教徒」『内陸アジア史研究』23, 25–48.
- Matsui Dai 2008b: Revising the Uigur Inscriptions of the Yulin Caves. 『内陸アジア言語の研究』23, 17–32.
- Matsui Dai 2010: Uigur Manuscripts Related to the Monks Sivšidu and Yaqšidu at “Abita-Cave Temple” of Toyoq. 新疆吐魯番學研究院 (編) 『吐魯番學研究：第三屆吐魯番學暨歐亞游牧民族的起源與遷徙國際學術研討會論文集』上海古籍出版社, 697–714.
- 松井太 2011: 「敦煌出土のウイグル語曆古文書」『人文社会論叢』人文科学篇 26, 25–48.
- 松井太 2013a: 「敦煌諸石窟のウイグル語題記銘文に関する簡記」『人文社会論叢』人文科学篇 30, 29–50.
- 松井太 2013b: 「契丹とウイグルの関係」荒川慎太郎・高井康典行・武田和哉・渡辺健哉 (編) 『契丹 [遼] と 10～12 世紀の東部ユーラシア』勉誠出版, 56–69.
- 松井太 2014: 「敦煌諸石窟のウイグル語題記銘文に関する簡記 (二)」『人文社会論叢』人文科学篇 32, 27–44.
- Matsui Dai 2015a: Old Uigur Toponyms of the Turfan Oases. In: E. Ragagnin / J. Wilkens / G. Şilfeler (eds.), *Kutadgu Nom Bitig*, Wiesbaden, 275–304.
- 松井太 2015b: 「古ウイグル語行政命令文書に「みえない」ヤルリグ」『人文社会論叢』人文科学篇 33, 55–81.
- 松井太 2015c: (白玉冬譯) 「敦煌莫高窟・安西榆林窟的回鶻語題記」阿不都熱西提=亞庫甫 (編) 『西域—中亞語文學研究』上海古籍出版社, 210–225.
- 松井太 2016: (白玉冬譯) 「蒙元時代回鶻佛教徒和景教徒の網絡」徐忠文・榮新江 (編) 『馬可・波羅 揚州 絲綢之路』北京大學出版社, 283–293.
- Matsui Dai / Watabe Ryoko 2015: A Persian-Turkic Land Sale Contract of 660 AH/1261–62 CE. *Orient* 50, 41–51.
- MCMRQ = Samuel N. C. Lieu et al. (eds), *Medieval Christian and Manichaeian Remains from Quanzhou (Zayton)*, Turnhout, 2012.
- MDQ = 吉田順一・チメドドルジ (Čimeddorji) 『ハラホト出土モンゴル文書の研究』雄山閣, 2008.
- Menges, Karl H. 1968: *Tungusen und Ljao*. Wiesbaden.
- 宮紀子 2011: 「ブラルグチ再考」『東方学報』86, 693–740.
- MKT = 『蒙漢詞典 (Mongyol kitad toli)』増訂本, 内蒙古大学出版社, 1999.
- MMHY = Antoine Mostaert / Igor de Rachewiltz (eds.), *Le matériel mongol du Houa i i u* 華夷譯語 de Houng-ou (1389), 2 vols. Bruxelles, 1977–1995.
- 護雅夫 1967: 「突厥第一帝国における šad 号の研究」『古代トルコ民族史研究』1, 山川出版社, 299–397.
- 森安孝夫 1991: 「ウイグル=マニ教史の研究」『大阪大学文学部紀要』31/32.
- 森安孝夫 1994: 「ウイグル文書割記 (その四)」『内陸アジア言語の研究』9, 63–93.
- 森安孝夫 1998: 「ウイグル文書契約文書補考」『待兼山論叢』史学篇 32, 1–24.
- 森安孝夫 2004: 「シルクロード東部の通貨」森安孝夫 (編) 『中央アジア出土文物論叢』朋友書店, 1–40.
- Moule, Arthur Christopher / Peliot, Paul 1938: *Marco Polo: the Description of the World*, I. London.
- 村上正二 1970: 『モンゴル秘史：チンギス・カン物語』1. 平凡社.
- 村上正二 1972: 『モンゴル秘史：チンギス・カン物語』2. 平凡社.
- 村田治郎 1939: 「厚和の塔と寺」『東洋史研究』4-4/5, 323–335.
- 村田治郎 1940: 『支那の佛塔』富山房.
- 中村淳 2008: 「2 通のモンケ聖旨から」『内陸アジア言語の研究』23, 55–92.
- 中村健太郎 2007: 「ウイグル語仏典からモンゴル語仏典へ」『内陸アジア言語の研究』22, 71–118.
- 牛汝極 2006a: 『文化的緑洲：絲路語言與西域文明』新疆人民出版社.
- Niu Ruji 2006b: Nestorian Inscriptions from China (13th–14th Centuries). In: R. Malek / P. Hofrichter (eds.), *Jingjiao*, Sankt Augustin / Nettetal, 209–242.

- 牛汝極 2008: 『十字蓮花』上海古籍出版社.
- 愛宕松男 1970: (訳注) マルコ・ポーロ『東方見聞録』上巻. 平凡社.
- 大竹昌巳 2015: 「契丹語の奉仕表現」『KOTONOHA』149, 1-15.
- 大竹昌巳 2016a: 「契丹小字文献における「世選之家」」『KOTONOHA』159, 1-12.
- 大竹昌巳 2016b: 「契丹小字『耶律幹特刺墓誌銘』所見の皇帝號は天祚皇帝に非ず」『KOTONOHA』161, 1-19.
- Pelliot, Paul 1930: Notes sur le “Turkestan” de M. W. Barthold. *T'oung Pao* (2. s.) 27, 12-56.
- Pelliot, Paul 1944: Une tribu méconnue des Naiman: les Bätäkin. *T'oung Pao* (2. s.) 37, 35-72.
- Pelliot, Paul 1959: *Notes on Marco Polo*, I. Paris.
- Pelliot, Paul 1963: *Notes on Marco Polo*, II. Paris.
- Pelliot, Paul 1973: *Recherches sur les chrétiens d'Asie centrale et d'Extrême-Orient*. Paris.
- Pelliot, Paul / Hambis, Louis 1951: *Histoire des campagnes de Gengis Khan: Cheng-wou ts'in-tcheng lou*. Leiden
- Porció, Tibor 2014: Some Peculiarities of the Uygur Buddhist Pilgrim Inscriptions. In: Chr. Cueurpers / M. Deeg (eds.), *Searching for the Dharma, Finding Salvation*, Lumbini, 157-178.
- PTMD = Völker Rybatzki, *Die Personennamen und Title der mittelmongolischen Dokumente*. Helsinki, 2006.
- Rachewiltz, Igor de 2004: *The Secret History of the Mongols*, 2 vols. Leiden.
- Rubruck/JM = Peter Jackson / David Morgan (eds.), *The Mission of Friar William of Rubruck*. London, 1990.
- 佐伯好郎 1943a: 『支那基督教の研究 1 : 唐宋時代の支那基督教』春秋社松柏館.
- 佐伯好郎 1943b: 『支那基督教の研究 2 : 元時代の支那基督教』春秋社松柏館.
- 佐口透 1943: 「モンゴル人支配期のウイグルスタン (上・下)」『史学雑誌』54-8, 1-71; 54-9, 72-97.
- 齊藤茂雄 2014: 「唐後半期における陰山と天徳軍」『関西大学東西学術研究所紀要』47, 71-99.
- Sertkaya, Ayşe Gül 1999: *Uigurische Sprachdenkmäler*'den beş mektup. *Türk Dili Araştırmaları Yıllığı Belleten* 1996, 237-264.
- Sertkaya, Osman Fikri 2002: Zu einigen neuen uigurischen Landverkaufsverträgen. In: S.-Chr. Raschmann / M. Ölmez (eds.), *Splitter aus der Gegend von Turfan*, İstanbul / Berlin, 267-289.
- Sertkaya, Osman Fikri 2006: Hukukî Uygur belgelerindeki para birimleri üzerine. In: O. F. Sertkaya / R. Alimov (eds.), *Eski Türklerde para*, İstanbul, 117-137.
- 庄垣内正弘 1978: 「古代ウイグル語」におけるインド来源借用語彙の導入経路について」『アジア・アフリカ言語文化研究』15, 79-110.
- 庄垣内正弘 1987: 「ウイグル文献に導入された漢語に関する研究」『内陸アジア言語の研究』2 (1986), 17-156.
- 庄垣内正弘 2003: 『ロシア所蔵ウイグル文献の研究』京都大学大学院文学研究科.
- Sokoloff, Michael 2009: *A Syriac Lexicon*. Winona Lake / Piscataway.
- 杉山正明 2010: 「モンゴル西征への旅立ち」窪田順平 (編) 『ユーラシア中央域の歴史構図』総合地球環境学研究所, 15-126.
- SUK = 山田信夫 『ウイグル文契約文書集成』全3巻. 小田壽典ほか (編). 大阪大学出版会, 1993.
- 高田英樹 2013: (訳) 『マルコ・ポーロ ルスティケッロ・ダ・ピーサ 世界の記: 「東方見聞録」対校訳』名古屋大学出版会.
- 高田時雄 2011: 「李盛鐸旧藏写本《駉程記》初探」『敦煌写本研究年報』5, 1-13.
- 武内康則 2016: 「契丹語の複数接尾辞について」『言語研究』149, 1-17.
- TĞ/Boyle = 'Ala-ad-Din 'Ata-Malik Juvaini, *The History of the World Conqueror*, 2 vols. Tr. by John Andrew Boyle. Manchester, 1958.
- TMEN = Gerhard Doerfer, *Türkische und mongolische Elemente im Neupersischen*, 4 vols. Wiesbaden, 1963-1975.

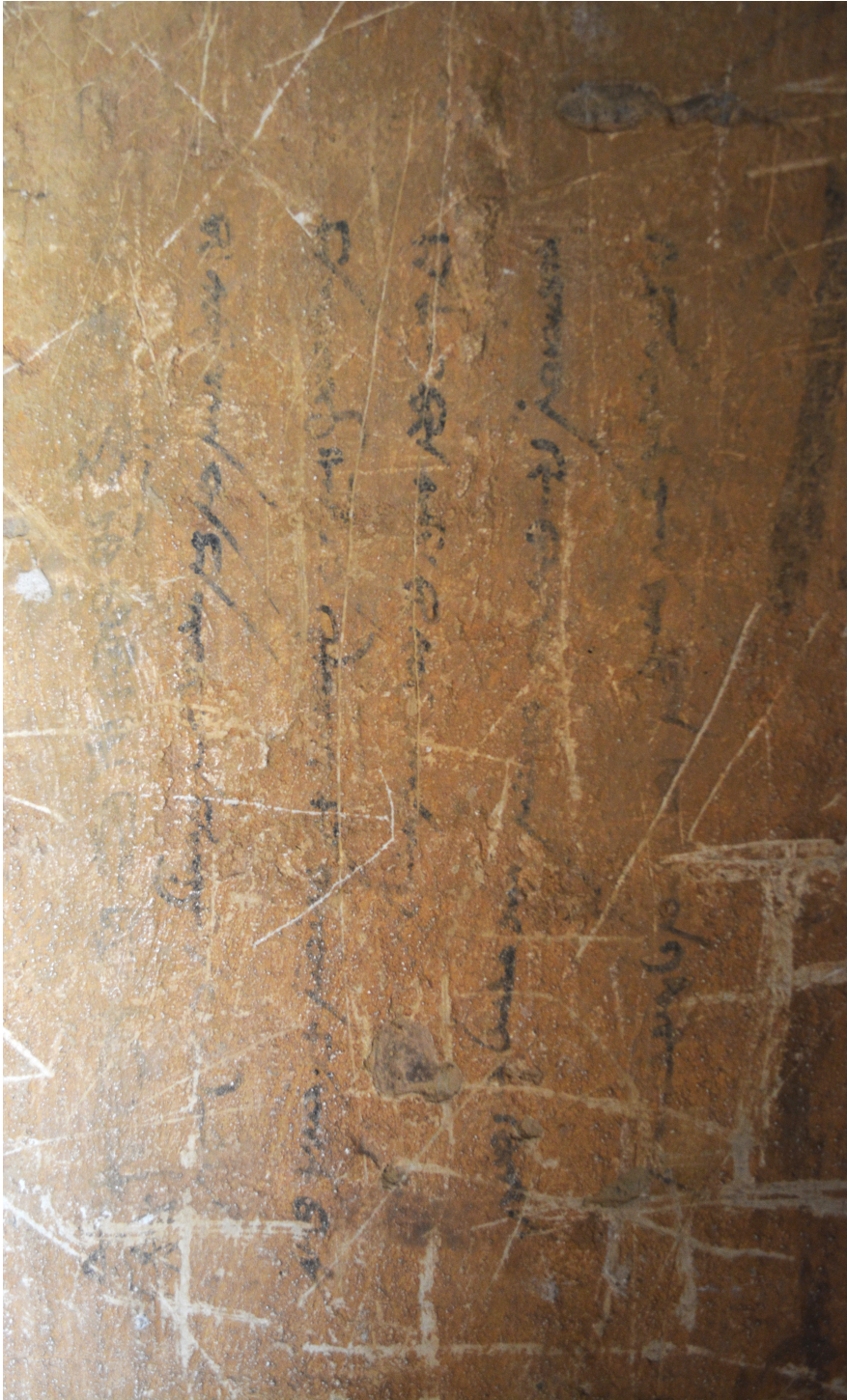
- 梅村坦 1984 「内陸アジアの遊牧民：ウイグル族における時間と空間」永田雄三・松原正毅（編）『イスラム世界の人びと3：牧畜民』東洋経済新報社，109-149.
- User, Hatice Şirin 2009: *Köktürk ve Ötüken Uygur kağanlığı yazıtları*. Konya.
- VOHD 13,21 = Simone-Christiane Raschmann, *Altürkische Handschriften*, Teil 13: *Dokumente*, Teil 1. Stuttgart, 2007.
- 王弘力 1986: 「契丹小字墓誌研究」『民族語文』1986-4, 56-70.
- Wittfogel, Karl A. / Fêng Chia-Shêng 馮家昇 1949: *History of Chinese Society Liao (907-1125)* (Transactions of the American Philosophical Society, n.s., 36). Philadelphia.
- 呉文良・呉幼雄 2006: 『泉州宗教石刻（増訂本）』科學出版社.
- 山田信夫 1989: 『北アジア遊牧民族史研究』東京大学出版会.
- 張漢君 1994: 「遼萬部華嚴經塔建築構造及結構規制初探」『内蒙古文物考古』1994-2, 69-74.
- 張佳佳 2010: 「元濟寧路景教世家考論」『歷史研究』2010-5, 39-61.
- Zieme, Peter 1978: Ein uigurische Fragment der Rāma-Erzählung. *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 32-1, 23-32.
- Zieme, Peter 1992: *Religion und Gesellschaft im Uigurischen Konigreich von Qočo*. Opladen.
- Zieme, Peter 2011: Notes on the Religions in the Mongol Empire. In: A. Akasoy / Ch. Burnett / R. Yoeli-Tlalim (eds.), *Islam and Tibet: Interactions Along the Musk Routes*, Farnham / Burlington, 177-187.
- Zieme, Peter 2015: *Altugurische Texte der Kirche des Ostens aus Zentralasien*. Piscataway.
- Zieme, Peter 2016: An Old Uighur Fictional Letter Supposedly Written by Prince Gautama from a Fragment in the Serindia Collection at the IOM, RAS. *Written Monuments of the Orient* 3, 64-72.
- Zieme, Peter / Kara György 1979: *Ein uigurisches Totenbuch*. Budapest.
- Zieme, Peter / 百濟康義 1985: 『ウイグル語の觀無量壽經』永田文昌堂.

(付記) 本稿は、新疆師範大學西域文史研究中心招標項目「突厥文回鶻文摩尼教歷史相關文獻輯錄」(課題番号 XJEDU040214B02), JSPS 科研費 JP13F03305, JP26300023, JP26580131, JP26284112, JP16K13286, JFE21 世紀財団 2014 年度アジア歴史研究助成ならびに東京外国語大學アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「新出多言語資料からみた敦煌の社会」による研究成果の一部である。フフホト白塔での数次にわたる調査研究活動に際しては、白塔文物管理所の杜建中所長から多大の支援を頂戴した。この場を借りて深謝申し上げる。また、白玉冬の現地調査にご協力下さった宮海峰教授(瀋陽師範大学)・ブレンジルガル Bürenjiryal 教授(内蒙古大学)、さらに成稿の過程で種々の有益な助言を賜った Peter Zieme 教授(Freie Universität Berlin)、Mehmet Ölmez 教授(Yıldız Teknik Üniversitesi)、高橋英海教授(東京大学)にも深甚の謝意を表したい。なお、本稿の内容に関する全ての責任が筆者兩名にあることはいうまでもない。



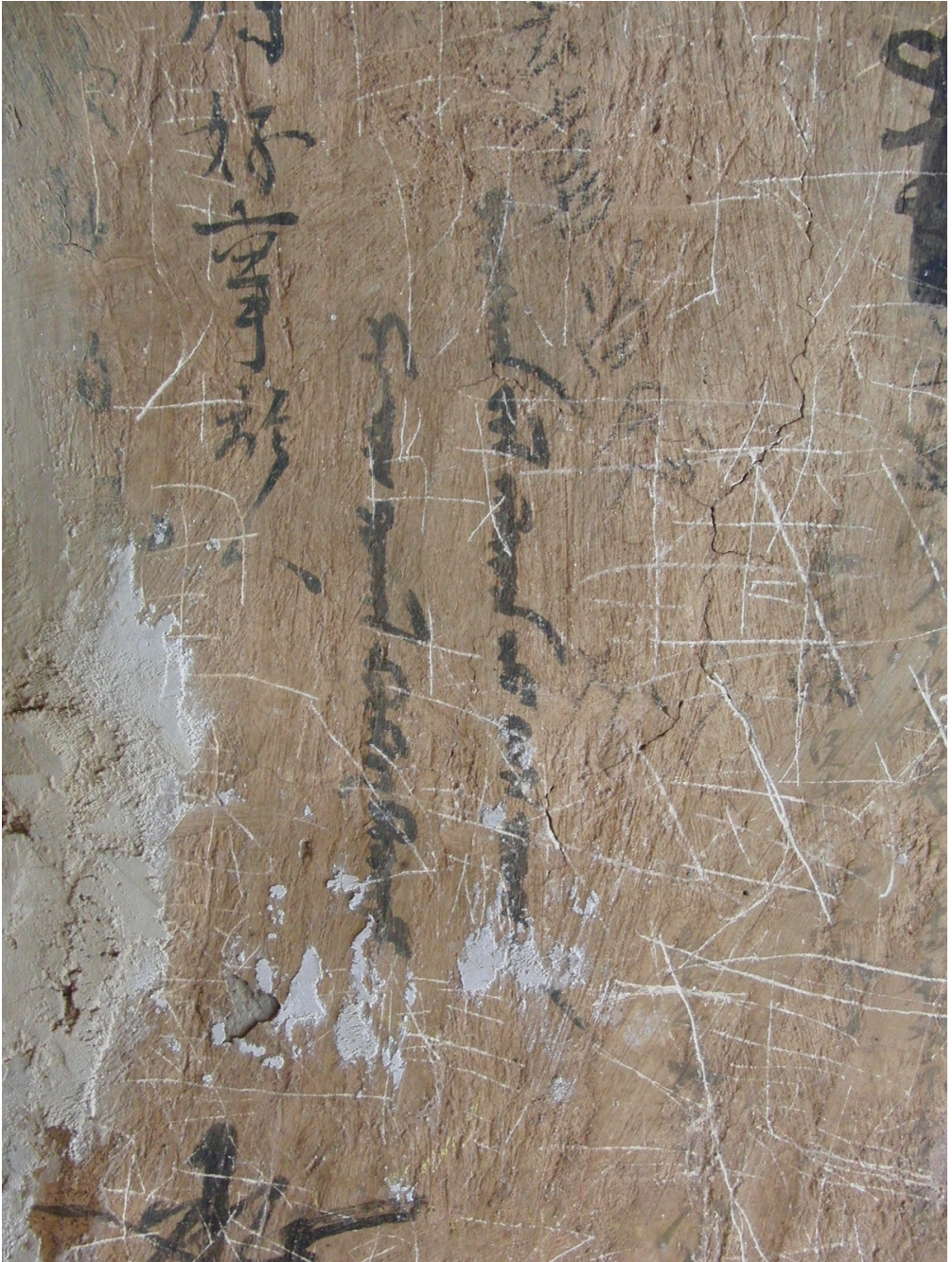
Text A

Second Storey, the White Pagoda of Hohhot (Inner Mongolia)



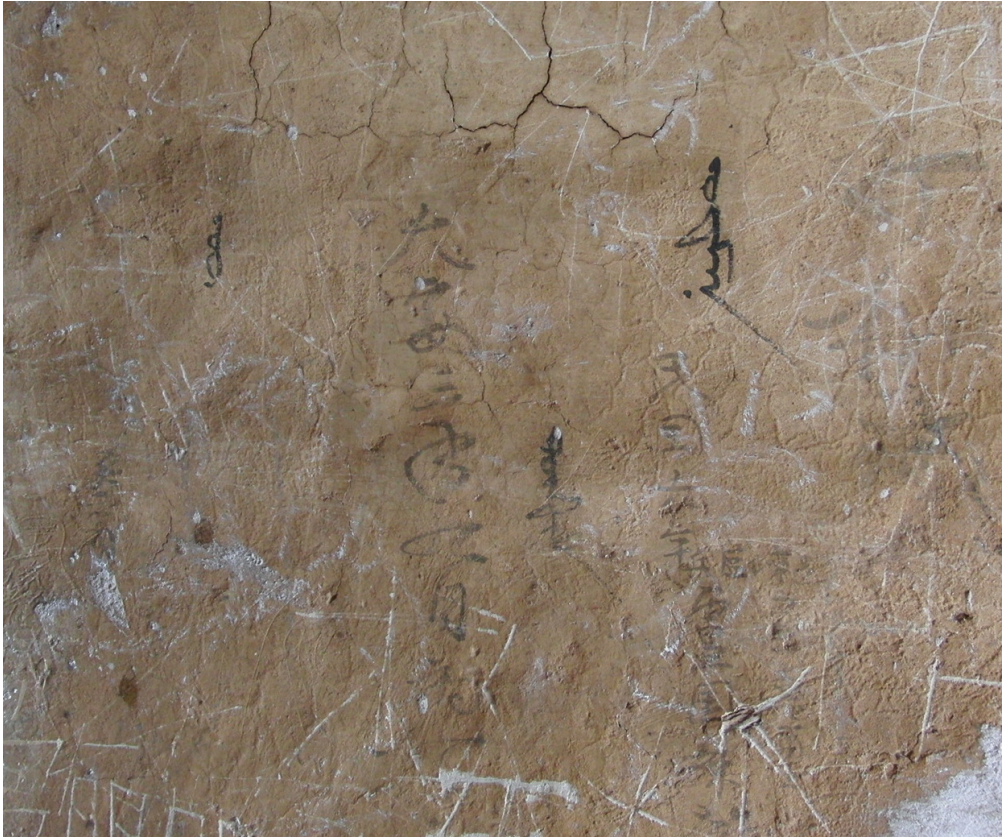
Text B

Third Storey, the White Pagoda of Hohhot (Inner Mongolia)



Text C

Third Storey, the White Pagoda of Hohhot (Inner Mongolia)

**Text D**

Fourth Storey, the White Pagoda of Hohhot (Inner Mongolia)



Text E

Fifth Storey, the White Pagoda of Hohhot (Inner Mongolia)



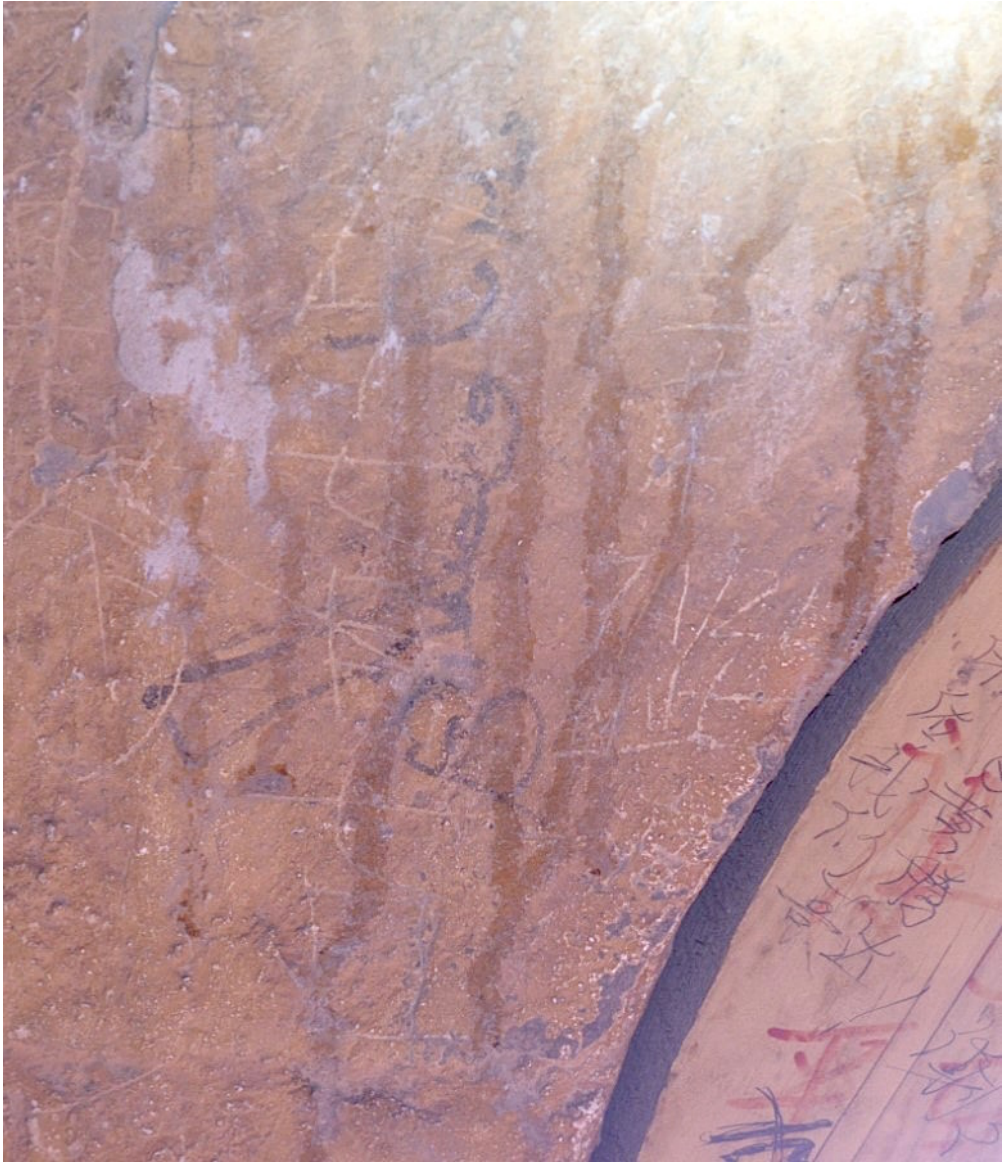
Text F

Fifth Storey, the White Pagoda of Hohhot (Inner Mongolia)



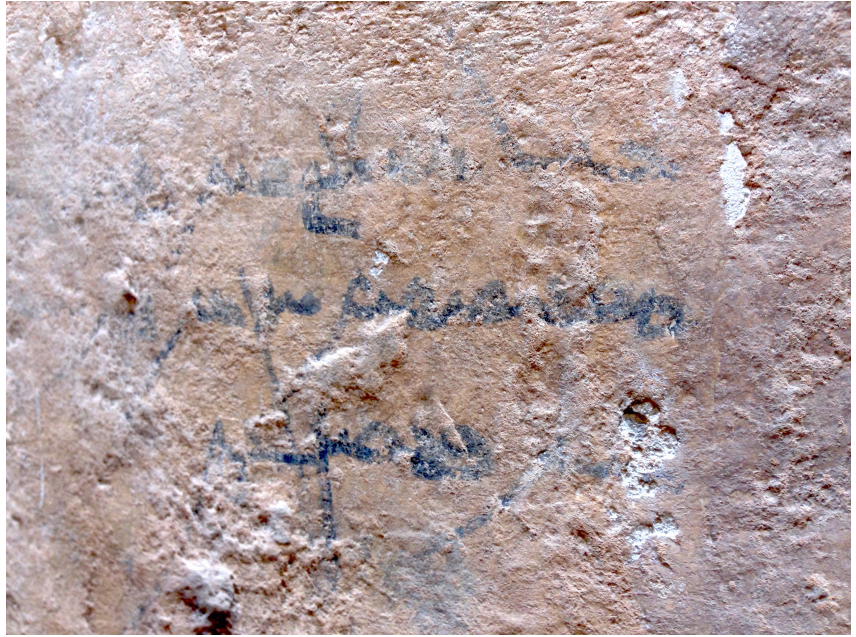
Text G

Fifth Storey, the White Pagoda of Hohhot (Inner Mongolia)



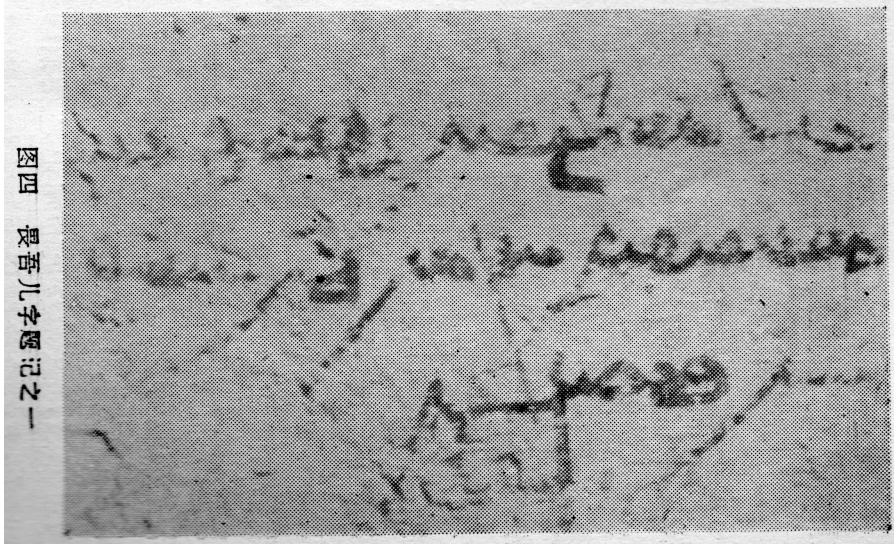
Text H

Sixth Storey, the White Pagoda of Hohhot (Inner Mongolia)



Sixth Storey, the White Pagoda of Hohhot (Inner Mongolia)

Text I



图四 畏吾儿字题记之一

After Li Yiyou 李逸友 1977, 57, fig. 4



Text J

Seventh Storey, the White Pagoda of Hohhot (Inner Mongolia)



Texts K, L, M

Seventh Storey, the White Pagoda of Hohhot (Inner Mongolia)



Text N

Seventh Storey, the White Pagoda of Hohhot (Inner Mongolia)



Texts O, P

Seventh Storey, the White Pagoda of Hohhot (Inner Mongolia)



Text Q

Seventh Storey, the White Pagoda of Hohhot (Inner Mongolia)



Text R

Seventh Storey, the White Pagoda of Hohhot (Inner Mongolia)



Texts S, T

Seventh Storey, the White Pagoda of Hohhot (Inner Mongolia)



Text T

Seventh Storey, the White Pagoda of Hohhot (Inner Mongolia)